金葉和歌集

金葉和歌集巻第一

春哥一

堀河院御時百首哥めしける時立春

こゝろをよみ侍ける

修理大夫顕季

打なひき春ハきにけり山川の岩まの氷けふやとくらん

春宮大夫公實

春立て梢よ消ぬ白雪ハまたきにさける花かとそみる

藤原顕仲朝臣

いつしかと明行空のかすめるハ天のとよりや春ハ立らん

皇后宮肥後

流ゝ社返細谷川の縁けハ今朝よりや春ハくるらん

百首哥の中ニ初春のこゝろを人々に

よミ侍りける

前斎宮河内

春のくる夜のまの風のいかなれハけさ吹にしも氷とくらん

初春のこゝろをよめる

大宰大弐長實

いつしかと春の帝に立初ハわしらの原にかすみたなひく

正月はしめつかた雪の降侍りけれハ

ゆきをよめる　修理大夫顕季
あら玉の年の初にふりしきは初雪とこそいふへかりけれ
同し
春宮大夫公實
朝戸あけて春の梢の雪みれは初花ともいふへかりけれ
實行卿の家の歌合によみ人のかはり
とてよみける
少将公教母
あさ緑かすみの衣春きては常盤の山も春とみゆらん
藤原顕輔朝臣
年毎にかはらぬ物は春霞立田の山のけしきなりけり
霞のこゝろをよめる

大宰大貳長實
あつさ弓春のけしきに成にけりいるさの山に霞たなひく
百首の哥中にうくひすをよめる
修理大夫顕季
鶯の鳴につけてやまかねふくきひの山人春をしるらん
初聞鶯といへる事をよめる
春宮大夫公實
かすかなる梅の立枝に鶯の初声きけはあまたまさる
正月八日春立ける日うくひすのなきけるを聞てよめる

藤原顕輔朝臣

かすみさへ雪わけて鶯の谷にふかくも出る初音なるらん

あらたさ鶯とききてとひすとよめる

源雅通朝臣

鶯のなくにさすかに今一声はなきそへてみけ

思ひ居しかと人々聞つけけり

あけ中鶯しいふ事とよめる

源俊頼朝臣

春雨は降しもしれぬを鶯の声にそはるの来るをしる

良暹法師思ひかけす北へまかりけるた

大弁経頼の家に梅盛に咲まさりて聞は

ちりもやするとてをりてつかはしける

いまたきたりけり

良暹法師

梅か香をたつねてそ社にきつれ

梅花来芳といふ事をよめる

前太宰大弐長房

梅の香は風にしられてにほひくるなり

朱雀院に人々まかりて閑庭梅花

と云事をよめる

大納言経信

くちよみんふこころさへは梅の花も独や春の風にちらまし

た非の家前今年梅もとよめる

藤原基房朝臣

数ならの新にしむれて梅か花に手ふれてそ香をもとめつれ

梅のなれとよめる

源忠季

浪わけてちりかゝる梅の花も香とは積もおきとらふ

子日のこころをよめる

大中臣公長朝臣

春日の子日に松はひきて社神さびゆかしきかまよふらめ

百首哥の中に子日のこころをよめる

大蔵卿匡房

春霞立かくせとも姫小松ひくまの野へに我はきにけり

柳緑随風といふことを

院御製

風吹は柳の糸のかたよりにもひくまゝ流れてもみ緑

百首の哥の中に柳をよめる

春宮大夫公実

河さきに咲ける風に波よせて竹河辺をめくる青柳の糸

池辺柳といふ事を

源雅通朝臣

風ふけは浪のあやおる池水に糸ひきそふる岸の青柳

春雨の心をよめる

前斎院尾張

いとの山こゆく人のかへさの春雨にぬれつゝもなほたえぬれ

霞中帰雁といふ事をよめる

菅原成通朝臣

春霞いてゝ去るは春霧のこなたにかへる雁金

帰雁をよめる

藤原経通朝臣

今はとてこしちにかへる雁かねはゐなのはらにもゆきかへるらん

花薫風といふ事をよめる

摂政左大臣

吉野山峯の桜や咲ぬらん麓の里ににほふ春風

白川の花見の御幸に

新院御製

幾つ我とし風も（花イ）待ちつゝも盛にあひにける

太政大臣

白川の流久しき宿なれは花のにほひものとかなりけり

人まかりてよめる

吹風も花のあたりは心せよけふをはつねの春とやはみる

大宰大貳長實

萬代のためしと見ゆる花の色をうつしとゝめよ白河の水

待賢門院兵衛

年毎に咲そふ宿の桜もなを行末の春そ久しき

源雅通朝臣

宇治前太政大臣家の御幸の日よませ給ひける

院御製

春霞立へたつともさきそめし花の色はよそにまかひて

遠山桜といふ事をよめる

春宮大夫公實

白雲とをちの高根に見えつるは心まとはす桜なりけり

松間桜花といふ事をよめる

内大臣

春毎に松の緑にうつもれて風にしられぬ花桜かな

左兵衛督實能

この春は長閑に匂へてもち枝さしかはす松のしるしに

山家花遥といふ事を

左京大夫経忠

山桜木末の風のさそへは花の盛に盛そふらふ

新院御方にて花契遐年といふ
事をよませ給ける

待賢門院中納言

白雲の波に桜の梢あまて千とせの春をかさぬる哉

藤原顕輔朝臣

萬代は見んとそ花の色なれはうつろひもせぬ名にこそ見え

終日尋花といふ事を

源貞輔朝臣

白雲にまかふ桜を尋ぬとてかゝらぬ山のなかりける哉

堀河院御時女房ともあまた花山の花見に
まかりけるに車をかへしていらせ給へと申せ
たまひて御前をめしてつかはしける
まろに女房とものかへりてまうてこさりける

ちる事も岩に瀧とも雲井の桜の盛なるらん

堀河院御製

源師俊朝臣

まつ人のなれはこそちらぬ桜なを吹かけまし春の山風

山花を旅といふことを

大宰大貳長実

鏡山うつれる花を見にたちよりて雨ふりけれはよみ侍る

深山花盛　堀河左大臣

峯つゝき桜をみつゝそてはゆく山路はるかにひとりかも

人々にさそはれて十首よませ侍り

けるによみ侍る

修理大夫顕季

桜花咲ぬる時はよし野山立ものほらぬ峯の白雲

宇治前太政大臣家哥合によみ侍る

とよめる哥

皇后宮摂津

散桜の庭をそ見る遣桜を風にしらぬ霞かな

源俊頼朝臣

山桜咲初しより久方の雲井にみゆる滝の白糸

花為春友といふ事をよみ侍りける

内大臣

ちるまはなともをりてみむ遠き春よりはのちの人まつ

遠見山花といふ事をよめる

大江匡房

初瀬山雲井にはなの咲ぬれは天の河なみたつかとそみる

藤原忠隆

吉野山峯にたなひく白雲とみゆるは花の梢なりけり

山花爲人といふ事をよめる

大中臣公長朝臣

とめくれは末はれしてや花遠き春を見すてぬ桜なりとは

堀河院御時女房のよりあはせに女房にかはりて

花見人わかれかたさをよめる

前斎宮文親か乳母

春毎にあかぬ色ひと桜花いかなる風の惜まさるらん

人よりかりてよめる

備正行家

よそにては惜しにさくらちるなれと思へは見えぬ梢なりけり

後冷泉院の御時皇后宮歌合に

ゆくてをよめる

堀河右大臣

春毎にかさねて見ん山桜雲かよしのの嵐吹くて

月前見花といふ心をよめる

大蔵卿匡房

月影に花見る夜半の浮雲は風のつらさにおとらさりけり

顕季卿の家にて桜花十首人々よませ侍りけるによめる

大宰大貳長實

春風のふきまよふ空に降雪は風に乱れて花そちりける

水上落花といふ事をよめる

源雅兼朝臣

花さそふ嵐や峯をわたるらん桜なみよる谷川の水

落花満庭といふ事をよめる

左兵衛督實能

けさ見れは夜はの嵐に散はてゝ庭こそ花の盛なりけれ

堀河院御時中宮にて風静花芳といふことをつかうまつる

源俊頼朝臣

梢にはふくとも見えて桜花かをるそ風のしるしなりける

落花の心をよめる

長實卿母

春毎にあかぬ桜の花なれは [illegible]

落花随風といふことをよめる

右兵衛督伊通

[illegible]

水上落花といふ事をよめる

大納言經信

水上に花や散らん山川のゐくゐにいとゞかゝる白波〔ハイ〕

菅原成通朝臣

よもの山に散はつる花をさそひこそ動〔時イ〕て風も嬉しかりける

落花多まちつくしつる事とかや

藤原永実

散かゝるさくらさへ雪の色にて花ちる山は寒けれど

堀川院御時花のちりけるを御覧じて

紀らくおほさきそらの雲は山桜

かくぞ流まぜすなく中宮のさかりに

たてまつるを給へりけると宮御歌

て奇あてもおもふをもおもはれなむ

かうまかりまうか

見るとよの

櫻花雪かとみえて吉野の山ぞかすみへだてゝ

花の庭遅ちりはなりつゝおもひなく

人もまちつる

郁芳門院安藝

庭の花もとの梢に吹返せちらすのみやは心なるべき

庭田落花といへる事をよめる

隆源法師

春ごとに盡ぬ散つむ桜花幾代の人に見せむとすらむ

春過ハまかりなるよ山田はつくるひまなくて
ちるをもしらすなりけり

高階経成朝臣

桜咲山田をはつる賤のおたまきくりや花をとふ尼
花をもみん所なりけり

右兵衛督経通

白雲と峯にはみえて桜花ちるまてハ麓の雪と社みれ

後冷泉院御時月のあかゝりける夜
女房御ともして南殿にわたりて残
花ひさしかりける庭の花ちらく
面白かりけるを御覧して是を題にて
殿人よみてせよとて女房を奉らせ給く
中宮の清少よ下野やおもんとて絶
まつらくしくらきまいりけるを
御覧して花のおりて清涼殿へお
はしますおりをまつへきよしおほせら
とらせていひしとおもはせまゐり
まさにハ清のさうまなりけり

下野

ちりにけり月の光のあかりをハ雲井の花といひておもはし

新院の殿上にて落花風にしたかふと
いふことをよめる

中納言雅定

散果る花はありかをしらすれハいとひし風そけふハ嬉しき

年ふかく入て百首歌よみ侍りける
さくらの心をよめる

権僧正永縁

山里ハ野へのさわらひもえ出る折にしもまつ社人ハ恋しけれ

百首の歌の中に杜若を

修理大夫顕季

東路のかやのあさのの杜若きよしとこそあめ咲すはなれや

春乃田をよめる

大納言経信

あらを田に細谷川をまかすれハ引しめなはにもりつゝそ行

なはしろをよめる

津守国基

賤のをかあら野沢の小田を打返し種まきてけりしめはへて見ゆ

後冷泉院御時弘徽殿女御の哥会に苗代をよめる

藤原隆資

山里の外面の小田の苗代に岩間の水をせかる日もなき

家の山吹を人〳〵あまたまうてきて
わかひきりけるにおりもとめてよめる

中納言雅定

我宿に又こむ人もなかりけりおりなさも山吹の花

各遠歎花

攝政左大臣

限ありてちるはならぬに惜き山吹をいつくなりとも井手の川波
おれしこゝろを

大宰大貳長實

善源寺にひさしくまうてゝ多ひさまり山吹の花

後冷泉院御時歌合に山吹をよめる

前大宰大貳長房

山吹に吹くる風も心して盛なるをちらさぬ宿
夕まつりとかんなしとおもへはあつ

攝政左大臣家參河

今日そ見る井手の川波くゝる山下てらし岩清水多
院の小田なるゝ攝上萬むしくのふ
事深くぬれつ

大夫典侍

冬の日は松にかゝりて常盤なる林にかゝる藤波

藤花とよめる

藤原顕輔朝臣

紫の雲のゆかりに藤波のかゝれる松も色遠き哉

池乃藤の花盛りなりけるを見てよめる

律師増覚

しる人もすまぬ我宿の藤の花誰を待とて咲残るらん

紫藤蔵松といへる事をよめる

良暹法師

松風のおとせざりせば藤なみを何にかゝれる花とし(ら)まし

二条関白家にて池辺藤花といふ事をよめる

大納言経信

池水にうつる影さへ紫の雲かとみゆる藤波の色

百首の歌の中に藤花をよめる

修理大夫顕季

住吉の松にかゝれる藤の花風のたよりに波やこゆらん

海辺藤花といへる事をよめる

神祇伯顕仲

めつらしき磯のほとりを藤浪の寄せくる波に色ぞみえける

隣家落花といふ事をよめる

内大臣家越後

芦垣のへたてはあれと落花も匂ひは我を隣ならまし

盛経母

花のちる[illegible]

三月尽のこゝろをよめる

春はけふ[illegible]

大僧都證観

惜しみかね春をしたへる心にそ

中納言雅定

寄三月尽恋のこゝろをよめる

内大臣

春は今日人をとゝめて暮れぬれは

重服に侍りけるころ三月尽日人のもとにつかはしける

藤原顕輔朝臣

とひ来れぬ[illegible]

摂政左大臣家にて人々に三月尽の心をよませ侍りけるに

源俊頼朝臣

海のうへ月のいるまてなかめつゝ
あはれ見んわれの猶とゝもかなん

金葉和歌集巻第二

夏部

う月のはしめつかた更衣のこころを
よみ侍ける　　源師賢朝臣

我のみそいそきたたれぬ夏衣ひとへに春（花イ）を惜しむ身なれは

二条関白家にて人々残花のこころをよみ
侍ける　　藤原盛房

夏山の青葉ましりのおそ桜はつ花よりもめつらしきかな

応徳元年四月三日内裏にて庭樹結
葉といへる事をよませ給ひける

院御製

おしなへて梢青葉に成ぬれは松のみとりも別れ（わかれ）さりけり

大納言経信

玉柏庭もはひろに成にけりこやゆふしてて神まつるころ

鳥羽殿にて人々哥つかうまつりけるに
卯花のこころをよめる

春宮大夫公実

雪の色をうはひてさける卯の花にをのの里人冬こもりすな

卯花連垣といへる事をよめる

大蔵卿匡房

何迄とこそ(?)くおもはゝ(?)山里に鳴ほとゝきす[illegible]卯花

卯花をよめる

江侍従

雪しろくまかひも果ぬ卯の花は暮ぬれは月の影かとそ見る

摂政左大臣

卯花のさかぬ垣ねはなけれとも名に流れたる玉川のさと

うの花を毎(?)の所にてよめる

中納言実行

神山の麓にさける卯花はたかしめゆひし垣ねなるらん

卯花をよめる

大納言経信

綾のめのぬのさらすとも見えつるは卯の花の咲る垣ねなりけり

源盛清

卯花を音無川の波とてねたくもをらて過にけるかな

大中臣定長

卯花の咲る垣ねは雲(?)とみえて花のさかりや[illegible]

鳥羽殿の歌合によめる

修理大夫顕季

深山(?)まてさそ(?)里さへ綾(?)なる花(?)の雲(?)のをち(?)の[illegible]らん

尋郭公といふ事をよめる

菅原嵩信

なきて又去年こえし時鳥いそぐ関路の初音きゝたし
時鳥の声十首人こそきゝつらん
こゝろづくしにまちぞかねたる

摂政左大臣

郭公まつとはなしにやまかれたるあさまの山にまたれぬるかな

源雅光

時鳥なかぬかぎりはかくれぬる人にしられぬ峯のこずゑに
郭公尋ねきつる日はこゝろにも二日ばかりやまたれかね
ふかれなくとこそまてしばしあり

橘成元

鶯のいかなる山のおくまでも尋ねきぬとも誰かつげまし
長實卿家歌合に
こゝろをよめる

左京大夫経忠

年毎にまつにつけてもこえぬるは鶯の声のもとめ来て
時鳥待つこゝろを

内大臣

忘れてはまた来ぬ人をまつ鶯の声を今はたのまれぬ秋の種

郭公をよみ侍る

藤原顕輔朝臣

時鳥まちてゑあかつきの河わさてにすあつゝ

永暦弐年内裏歌合に郭公を

人ふかゝらてよあつ

藤原孝善

子規人もきゝにかくれてわれかさきの山の峯を

子規をよみ侍る

こゝろの聲はまち(?)つ時鳥山田のかほる(?)なりさきはれ

権僧正永縁

人々十首歌よみ侍りけるに時鳥を

源俊頼朝臣

待つ人の尋きつるを郭公あれとかの山のほとゝきすをまつるは

中納言實行

いまか山郭公をかんまし時鳥まつに声あらしそなへあへさのみ

郭公鳴きつる峯（異本：峯イ）をこのうち峯をよむ

中納言公成

おもひの外なるとは時鳥まつさくよりほとゝきすわれはし

待郭公といふことをよませたまへる

院御製

郭公まつにかゝりてあかれはや散花にも人もまつらん

後徳の家の哥合に郭公をよめる

後二條関白家經方

待人の宿をは過て郭公まちし山へとゆくそなるや

中納言女王母

子規なけはくらきを迷ふこともなしあやめのこゑ

郭公をよめる

前斎院六條

宿近く志るへかくて郭公まつよりも猶流れける下に

中納言雅定

郭公待夜は山ほとゝきすこゑさへしけれ

宇治前太政大臣家の哥合に譲て

ほとゝきすをよめる

山近く浦こく舟は郭公なくわたりこそとまりなりけれ

康資王母

匡房の美作守にて下りける道にて時

鳥をきゝてよめる

中原高真 貞イ

こゝろあてによそふれはけふ綿我ならぬ舟のかたきね

郭公をよめる

かくしつゝ一声鳴きて明ぬれはあつさもしらぬ夏の夜の空

藤原成通朝臣

月前郭公といふ事をよめる

皇后宮式部

鵑雲のたえまにいる月の影ほのかにも鳴わたるかな

暁郭公といふ事をよめる

源定信

ほとゝきすこゝにもあふ坂山の鳴けれは又こえつ雲まよふかや

尋郭公といふ事をよめる

よみ人しらす

子規なかなかあけてもありつる人をまちてかへるさの人

夜中郭公といふ事をよめる

大納言経信

時鳥雲ちにまよふ声すなりをやみたにせよ五月雨の空

五月五日實能卿のもとにつかはしける

はるかにおもふこと

内大臣

あやめ草ねかくも君かためにこそひきもしられめ

永萬六年殿上にて根合ありける

めてたくゝれる

大納言経信

萬代にかはらぬ物は五月雨の雫にかほるあやめなりけり

郁芳門院根合にあやめをよめる

藤原孝善

あやめ草ひく手もたゆくなかき根はいかてあさかの沼に生けん

承暦二年内裏哥合にあやめを

春宮大夫公実

玉江にやけふのあやめを引つらんみかける宿の妻と見ゆるは

宮つかへしける娘のもとに五月五日くす玉つかはすとて

権僧正永縁母

あやめ草我身のうきを引かへてまくへくもなきねに生ひけるかな

百首の中にあやめをよめる

春宮大夫公實

あやめ草ねたくも風に生る梅かれは稚なき人を引しめてなん

五月五日家にあやめふくを見てよめる

左近府生秦兼久

同しくはそのくさけあやめ草有明の月かけにこそ見え

むかし中院にすませ給ひけるころ

見くさりけるあやめを人の中の院の

とやまをかけてくゝるませきのひゞくらん

第三宮

浅ましやし古堂のさみたれ草我おもふ人にまよふかな

百首歌中に五月雨をよめる

参議師頼

五月雨ハ沼の岩かき水こえてまこもかるへきかたもしられす

五月雨のこゝろをよめる

藤原定通

五月雨ハ日数ふれとも河水のなかれハ下くゝるらん

嘉暦二年内裏歌会に五月雨を

こゝろをよめる

源通時朝臣

五月雨ハ玉江の水やまさるらん蘆の下葉のかくれゆけハ

権中納言俊忠家の歌合に

五月雨のこゝろをよめる

藤原顕仲朝臣

五月雨にみかさまさりて川まさきのつき橋かくるゝ汀に

五月雨のこゝろをよめる

右兵衛督実能

さみたれハ田のくろも見えすなりにけり水かさまさりて

三宮

五月雨に入江の橋も浮ぬれはおろすいかたの便社なれ

摂政左大臣家にて夏月の心をよめる

神祇伯顕仲

夏の夜の庭に降しく白雪は月の入社消ゆるなりけれ

権中納言俊忠卿の家歌合に水鶏

のこころをよめる

藤原顕綱朝臣

里毎にたゝく水鶏の音すなり心のとまる宿やなからん

摂政左大臣の家にて水鶏のこころをよめる

源雅光

終夜はかなくたゝく水鶏かなさせる戸もなき柴の庵を

實行卿の家歌合に夏風の

こころをよめる

修理大夫顕季

夏衣すその草を吹風に思ひもかけす鹿や鳴らん

水風晩涼といふ事をよめる

源俊頼朝臣

風吹は蓮のうき葉に玉こえて涼しくなりぬ日晩の声

とかしのこころをよめる

源仲正

ゆふかけしのゝ影のうき橋をさきとやいはんかたの庵

神祇伯顕仲

さゝなみや山のはそらに見えしより衣のひもさへとけし夜の月

家の歌合に名所橋をよめる

中納言俊忠

さ月闇花たちはなのかをりをは風のつてにそ聞へかりける

百首の中に名所橋をよめる

春宮大夫公実

宿毎にかゝる橋をそ見しひとつ一本の末を風にまかせて

二条関白家にて人々歌題を事をよみ侍る

源俊頼朝臣

こゝの里も夕日さしつゝあさまたき霞のうちに見えし道

寄行の家の歌合によう川の心をよめる

中納言雅定

大井川いくせの水の見えしより流のすゑをたえすかはらん

夏月をよみ侍る

源親房

玉くしげふたかみ山の木の間より出るはゆふ夜の月

六月廿日ころは秋の節に入る日人の
りとまつりしける

摂政太政大臣

六月のてる日は影にさへすゝしき風のみ秋は来にけり

公実卿の家にて對泉翫月といふ
こゝろをよめる

藤原基俊

夜な〳〵の月はかねてやさかひける岩間の清水いくよ泛ひつ

秋隔一夜といへる事をよめる

中納言顕隆

見るをこそちかのみさやま風のおとしきさは
一夜をへだてゝ秋やこゆらん

金葉和歌集巻第三

秋歌

百首歌の中に秋立心をよめる

春宮大夫公実

とことはに吹夕暮の風なれど秋立日こそ涼しかりけれ

野草帯露といふ事をよめる

大宰大弐長実

はくさとをふかきさねの萩の白露を吹みたるらひて秋の初風

秋草花といふ事をよめる

皇后宮肥後

萩がえもやほころひて白露も秋の初風吹てこそしれ

後冷泉院御時皇后宮春秋歌

合に七夕の心をよめる

出羽弁

萬代に君ぞ見るべき七夕のゆきあひの空を雲のうへにて

七夕のこゝろをよめる

能因法師

七夕の苔の衣をいとはずは人なみなみにかしもしてまし

七月七日文のおくにかきてつかはすとて

よめる

橘元任

萩夜はりやまさかて七夕のあまつまてやかさねし袖を
七夕のころもとしめつ

前斎宮河内

こひ〳〵てとし斗や七夕の枕にちらぬつゆならん

此哥千載四ニ入

三宮

天河ねよしとのこゝろのくさの舟のかちもとらなを

中納言国信

七夕のあふ夜の雲ぞまちあへずあはれなるまさきを隠

七夕待翁のことよめる

内大臣

浪わけてあふ時もしる七夕の洞の色ははるゝさゝなみ

皇后宮権大夫師時

七夕の河瀬の洞や花のゆくへも雲ぞまちける

内大臣家越後

天河みなかみの舟にかちまけての中まとふてかちをもそら

源俊頼朝臣

海つきは渕をもおしで天川わたる洞にありまさるらん

草花告秋といふことをよめる

源雅兼朝臣

咲初るわかれの葉の女郎花秋をまつへてのちの妻かとぞ思ふ

あはれしこゝろをよめる

源縁法師

咲にけりわかしめし女良花いく代とともに秋の錦を

秋のはしめの心をよめる

大納言経信

とふ人も秋はこゝにきにけり山里の戸さしをひらく桂かせ哉

田家早秋といへることをよめる

右兵衛督伊通

いつしかと吹風の音も宿すきて荻のはに秋をしる哉

山家秋といへることをよめる

藤原行盛

山深み問人もなき宿なれと外面の小田に秋はきにけり

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といへる事をよめる

大納言経信

夕されは門田の稲葉おとつれてあしのまろやに秋風そ吹

三日月の心をよめる

大江公資朝臣

山のはにあかく入ぬる夕月夜いつ有明にならむとすらん

按察左大臣の家にて夕月夜のこゝろを

よませ侍りけるによめる

藤原忠隆

風吹は松やとゝめむあかしかた浦のあくまて秋の夜の月

後冷泉院御時殿上の哥合に月
のこゝろをよみける

大納言経信

月影の流るゝ末に天の原雲ゐはるかにかゝる嵐よ

月をこひのおもしといふことをよめる

法橋忠命

草枕このたひ○ねにそおもひ知月よりほかの友なかりけり

志つ家に月とかへるしといふことをよめる

顕仲卿女

諸ともに草葉の露のおきゐつゝ独やかくて秋の夜の月

旅泊月といふ事をよめる

前中納言伊房

何ふありてそ忍ふる月影をみるらん人そ侘しき

鳥羽殿にて旅宿月といふことをよめる

春宮大夫公実

我社そ志ほのせとに旅○ねする雨のあかしの宿の月かな

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて池上

名月といふことをよませたまひける

院御製

池水にこよひの月を移しもて心のまゝにわかものとみる

大納言経信

てる月の岩まの水にやとらすは玉ゐる数をいかてしらまし

明月をよめる

民部卿忠教

いつくにもこよひの月をみる人の心やおなしそらにすむらん

後冷泉院御時皇后宮歌合に駒迎の
こゝろをよみ侍ける

藤原隆経

引駒の数よりほかにみえつるは関の清水の影にそ有ける

駒迎のこゝろをよめる

源仲正

東路をはるかにいつる望月の駒にこよひやあふ坂のせき

八月十五夜の心をよめる

源親房

さやけさは思ひなしかと月影をこよひとしらぬ人にとはゝや

閏九月のありける年八月十五夜よめる

春宮大夫公実

秋は猶残りおほかる年なれとこよひの月の名こそ惜けれ

水上月といふことをよめる

前斎院六條

雲の波かゝらぬさ夜の月影を清瀧川にうつしてそ見る

九月十三夜閑に月をみるといふ事をよめる歌

源俊頼朝臣

池のおもや霧を拂へる雲間よりうつる秋夜の月

月をよめる歌

皇后宮肥後

月きよみてらす水はほのかにも人のよははかりて物を思ひけり

月は入かくれたるをよめる

源師俊朝臣

いへてこそしらかゝれ天河流て月や出ぬらむ

經長卿の桂の山庄にて閑に月をあそふといふことをよめる

大納言經信

とはこの桂の里の月をみてやひかりそふらむ秋の夜

承暦二年内裏歌合に月をよめる

春宮大夫公實

日くもりさゝ影をとゞめぬ山水に入月を猶まちぞわたる

宇治前太政大臣家哥合に月を

よめる

皇后宮摂津

ちる月の光さえけり宿ごとに秋風かはりむらさめぞふる

源俊頼朝臣

山水に雲の衣をぬぎ捨て独りぞ月の立のぼるかな

水上月

摂政太政大臣

芦鶴のひとつゝもなき浪の上にかけて宿れる夜半の月影

宇治前太政大臣家哥合に月をよめ

る

一宮紀伊

鏡山峯より出る月なればくもる夜もなきかげをこそみれ

秋なかばのこよひばかりの月なれば

やまのはをまちてもあるかな

参議師頼

海辺のなかめといふ事を思ひやりて浦のなかめの月の光

秋月如昼といふことを

藤原隆経

まことにの雲まもりさえ海辺にてとまる月をまちて

叙明月といふ事をよめる

源行宗朝臣

久かたの天津風に雲晴て心のまゝにすめる月かな

八月十五夜に人々て哥よみ侍けるに

よめる　　平師季

三笠山光さして出しより曇らて明す秋の夜の月

宇治入道前太政大臣の三十講の哥

合に月の心をよめる

よみ人しらず

宿からそ月の光もまさりけるよの曇なくすめる也けり

月をよめる　　藤原忠隆

[illegible]

また花林院の哥合に月をよめる

権僧正永縁

いつれの秋ハ光のまさる鏡遠三笠の山の端の月

月の哥とてよめる

藤原顕輔

三笠山さしくる月の清けれハ神代の事も思ひこそやれ

大宮太政大臣家の哥合に月の心をよめる

大納言経信

三笠山峯より出る月影ハ佐保の川瀬の氷なりけり

顕季卿の家にて九月十三夜人々て月の

寄夕顔月

大宰大貳長實

くまもなく咲こしゆふかほ月影にたれか垣ねの人はわかまし

源俊頼朝臣

村雲や月の隈をはのこふらん晴ゆくまゝにてりまさるらん

月のこゝろとよめる

藤原家經朝臣

とふ人は今はあらしの月影の山里まてそ尋来にける

月照古橋といへることをよませたまへる

二条

としへて人もかよはぬ古橋は月計社渡りけれ

海上月とよめる

藤原實光朝臣

月影のなみにうかせて見ゆる夜はあかしのうらやまとの

ほし

大宰大貳長實

さしのほる玉のをはひて出る夜にひとしみしかる秋の夜の月

永萬元年殿上哥合月のこゝろをよめる

藤原家經朝臣

よそにのみ雲井の月はなかれても軒はに月そさやけかりける

月前旅宿といへることをよめる

修理大夫顕季

松の戸のまにこし後夜すくしつる月とこそいへ

独月とよめる

藤原有教母

禅定に入まとのうちの事をおもひなから月の前にてよするなる人

行路暁月といへる事をよめる

権僧正永縁

旅ねする山路の道の有明の月のかけとそ山をいてゆく

山をいつる月を行路といへる事を

よめる

左衛門大臣

有明の月待ほとの山のはにこそこゝろかゝれる

山家暁月といへる事をよめる

中納言顕隆

山里の門田のいなのほのほのとあくるもしらす月を眺めて

月はわすれもせし明石にまかりて月

とおもふこのあかつきまちてこそ見し

月をいへるをきゝてよめる

平忠盛朝臣

有明の月もあかしの浦風に波はかりこそよるとみえしか

月前落葉といへる事をよめる

源俊頼朝臣

嵐とや葉守の神もこゝろ見ん月に紅葉の色見えけり

荻とよめり

前斎院六条

霧しきて野への秋風ふきそひて荻我も枕に音そすなる

たゝとりとはつくるしとよめり

殷仲宣女

さしはの夕暮にかよふ葉山のさとに虫の音そなく

鹿とよめり

よみ人しらす

荻葉にそよけつたらし雁金のなくなるこゑもあはれなりけり

寄合かりを

春宮大夫公実

いかにせん山里の風に嵐やかきたらしゆふ庵の人のねさめも

鹿とよめり

三宮大進

妻こふる鹿そ鳴なる獨寝のとこの山風身にやしむらん

曉の鹿とはつるをよめり

皇后宮右衛門佐

よふくるまゝに月影に霧とかくさるゝ鹿のこゑ

夜の鹿といふ事をよめり

内大臣家越後

夜半にや鳴なるそあくかな我身は簾の末あまりはよし

摂政左大臣家にて擣衣隔簾といふ
事をよみ侍る

源雅光

さえ社は露に遮りて擣ちつる簾のあたりかくらむ
簾のすきまくもある

藤原顕仲朝臣

華を秋果なるやさしくも風と小雨の山井のはなれ

藤原行家

秋すぎて妻戸の簾をとほしつゝ枝のみなせそなりけり

野花帯露といふ事をよみ侍る

皇后宮肥後

白露にに人もかそへ秋萩の花毎にかゝるをかし

大皇太后宮大弐会に人々よみ侍りける
ことのこゝろとやもある

僧正行尊

小萩原白露は白露も多く萩が枝の乱れて

萩といふ事を

大宰大弐長実

志らけのまに萩原露ふかくおきつゝ袖さへ人にうつしをきける

女良花をよめる

隆源法師

よそにて下葉の野辺やそゆらん花のあたりにかよふ秋風

顕隆卿家に歌合し侍りける時女郎花をよめる

中納言俊忠

夕露の玉かけそむる女郎花野原の風にあまりなびくな

女良花をよめる

藤原顕輔朝臣

白露や心おく覧とゝ色めく野辺に人かよふとて

摂政左大臣

女良花たをれ風まの風になびきてまさに白露に心とゝむる

摂政左大臣家にて歌合し侍りけるに蘭をよめる

源忠季

さほ川の汀にさける藤袴なみのよりてやかけてみゆらん

藤袴をよめる

右兵衛督伊通

野からふ人もなきにや藤袴秋の野毎ににほふなるらん

神祇伯顕仲

さゝ木の末はらそよくわたる人もかよはぬ後の萩原

鳥羽殿の前栽合によませ給ひけるにをみなへしを
よめる

春宮大夫公実

あたしのゝ露ふきみたる秋風になひきもあへぬ女良花かな

田野花といふことをよめる

藤原伊家

いましもあれ東路の宮田の萩をかりてゆくらむ

野花留人といふことをよめる

平忠盛朝臣

行人をまねくか野への花薄こよひもこゝに旅ねせよとや

堀川院御時御前にてをのをの題を
さくりて哥つかうまつりけるに
すゝきをとりてつかうまつれる

源俊頼朝臣

うつらなくまのゝ入江の浜風に尾花なみよる秋の夕暮

河霧といふことをよめる

藤原基光

うち河の川せもみえぬ夕霧に槇の嶋人舟よはふ也

藤原行家

河霧の立こめつれハ高瀬舟わけ行棹の音のミそする

郁芳門院哥合に菊をよめる

中納言通俊

盛なるまかきの菊をけさみれハまた空さえぬ雪そ積れる

鳥羽殿の前栽合によめる

修理大夫顕季

千年まて君か摘へき菊なれハ露もあたにハおかしとそ思

摂政左大臣家にて隣家紅葉といへる事をよめる

藤原仲実朝臣

よそなれと梢の立枝ハ紅葉まて我宿にかせの吹よせし哉

承暦二年内裏哥合に紅葉をよめる

源師賢朝臣

ちるこそ紅椛やけさハ月のかけにちりゆく紅葉なりけり

宇治前太政大臣大井河にまかりけるともにまかりて紅葉といへる事をよめる

大納言経信

大井河岩浪高し筏師よ岸の紅葉にあからめなせそ

大宮右大臣家哥合に人にかハりて

かゝられくをとよめり

源俊頼朝臣

嵐山の紅葉ちりしきて小坂の実の戸川に錦をしく
落葉をとよみ侍る

藤原俊家

戸川にあらしの嵐に立田姫錦のかゝるよ雨過也
大井河の月霧よりつゝまれり

修理大夫顕季

大井川井せきの嵐の吹をハ紅葉をせきける滝と見え
深山紅葉といふ事をよめり

大納言経信

山守よをのゝ音たかくひゝく峯の紅葉をよきてきれ
りうちとよみ侍る

神祇伯顕仲

なかれくる峯の紅葉やちらしけり林麓の里ハ嵐さそふる
大井河のせきにて水上落葉とい
ふる事をよめり

藤原伊家

松ちる峯をこゆる鴨ちかハをのゝ葉の紅葉もかさねて
落葉埋橋といふ事をよめり

修理大夫顕季

小倉山峯の嵐の吹からに谷のかけ道紅葉もとまれり

落葉落水といへる心をよめる

大中臣公長朝臣

大井河ちる紅葉葉にうつもれてとなせの瀧は音のみそする

落葉随風といへる心をよめる

大宰大弐長実卿母

冬深きみ山かくれの紅葉こそ嵐の風のたよりなりけれ

九月盡の心をよめる

中原経則

わかれゆく秋の山への秋霧の面影のみそたちわかれぬる人

源俊頼朝臣

草も木も紅葉渡る露霜をしたにまかせて秋は行らん

九月盡の日大井にてよめる

春宮大夫公実

惜めともとまらぬ秋の紅葉葉は数見てしよりかへる秋のとまりなりける

金葉和歌集巻第四

冬部

承暦二年御前にて殿上のをのこ
ども題を探りて歌つかうまつりけるに
時雨をよめる

源師賢朝臣

神無月しくるゝまゝにくらふ山下てる斗紅葉しにけり

従二位藤原親子家の草子合に
時雨をよめる

修理大夫顕季

時雨つゝかつ散山の紅葉をいかに吹よの嵐なるらん

[illegible]の百首歌読せけるに
時雨をよめる

権僧正永縁

山川のみなそこまてに時雨には紅葉の色そ深くなりける

源定信

草木の枝をわかて時雨れは松の緑もたのむなりけり

時雨をよめる

摂政家三河

神無月時雨の雨の降まゝに色まさる鞍馬山かな

後朱雀院御時うへのをのこども紅
葉といふことをよめる
前中納言資仲
紅葉ちる山は秋霧晴ぬとも立田の河の流にそしる
大井河にまかりて紅葉のうたをよめる
源経親（平イ）
大井河紅葉をわたる筏には棹に錦をかけて社見れ
落葉浅水をよめる
大納言経信
三室山紅葉散らし旅人の菅の小笠ににしき織く

竹風似雨といふことをよめる
前中納言基長
まよ竹の葉末を袖とおもひつゝ夜もすから社は風と知るらし
十月十日ころつれに庵のかきさくらを
こえてよめる
法印光清
何事に秋果ぬらんと庵のとひらきて妻とこそ見れ
百首哥の中に紅葉をよめる
源俊頼朝臣
立田河しからみかけて神なひのみ室の山の紅葉をそみる

あしろをよみ侍る

皇后宮肥後

ひとかたに[illegible]の[illegible]白浪の[illegible]

月照網代といへる事をよめる

大納言経信

月清み瀬々の網代によるひをは玉もにさゆる氷なりけり

旅宿冬夜といへる事をよめる

旅ねするよとこさえつゝ明ぬとやとかたそ鐘の声きこゆなる

関路千鳥といへる事をよめる

源兼昌

あはちしまかよふ千鳥のなく声にいくよねさめぬすまの関守

神祇伯顕仲

風早みとしまかさきをこきゆけは夕浪千鳥立ゐなくなり

千鳥をよめる

藤原隆経朝臣

高せ舟棹のしつくもこほれるはあし間にひとりわひしはなりけり

池水結氷といへる事をよめる

内大臣

池水はこほりにけらし月かけも人まてすめる鏡なりけれ

百首哥中に氷をよめる

藤原仲実朝臣

志賀のからさきの(?)ふきしく風さえてこほりの池にたちさゆるかな
冬月をよめる
神祇伯顕仲
冬の夜のこほりにさゆる月影は霜まよひける社なりけれ
氷池上といへる事をよめる
大納言経信
水鳥のつらゝの枕ひまもなしむへさえけらし風となくも
深山霰をよめる
大蔵卿匡房
ふる風のしたふくかけの見えて山にあられ降りけり
水鳥近草といへる事をよめる
大中臣公長朝臣
ふる霜は霜かれはてゝ岸の草のはかなくも心ひとつや
守浪や(?)奥の(?)友(?)衣(?)家(?)の今宵(?)雪をよ
める
源頼綱朝臣
夜をこめて風さえてこそ(?)かく山に雪降るなり
橋上初雪といへる事をよめる
前斎院尾張
白浪の立渡るかと見えつるは浜名の橋につもる白雪
初雪をよめる能

大納言経信

初雪ハ槙の葉白く降にけりこや小野山の冬のさひしさ

雪中鷹狩の心をよめる

源道済

ぬれ〳〵も猶狩ゆかむはし鷹のうは毛の雪をうち払ひつゝ

鷹狩の心をよめる

俊頼朝臣

はし鷹をとりかふ沢に影見れハ我身もともにとやかへりせり

内大臣家越後

あとたゆるやまとのゝ嵐時雑子さそハゝ風人ハつれなき

百首歌の中に雪の心をよめる

大蔵卿匡房

いまよりハ末の松山こすこさハ浪の初雪消ぬ社なれ

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる

皇后宮摂津

降雪に杉の青葉もうつもれてしるしも見えす三輪の山本

中納言女王

山城のときはつ松に降雪ハ春も緑の色やわかれぬ

大嘗会主基方備中国沼弓山をよめる

藤原行盛

雪ふれはやとの山の梢にはまたきにあまる花咲にけり

雪の哥とてよめる

源俊頼朝臣

我よはひもりまくに霜おきはてゝうつゝ雪はふりつゝ

雪の御幸にとをくまいりまれなし

こゝろはとをさかりし使を待りて

つかうまつれり

六条右大臣

あさ毎に見る人の影もあかれぬは雪とも菊ともいはれぬ

よしなしとよめる

皇后宮権大夫師時

まえ人の名に立畑さとも山は雪まよふ雲てこそありけれ

百首哥の中に雪とよめる

隆源法師

冬ごもり雪降ぬれはさきの松の根山おとして見

皇后宮肥後

道もなく積れる雪に跡絶てふるさといかにあはれなる

選子内親王よみ侍りけるに

時雨降ぬる夜の月のかゝりたる夜まつ

ふりまれし女房達ねぬる夜もまつる月

もみんとやまちし殿上人にもよしもひ
つらぬる哉

藤原道房朝臣

かきくもり夜ふかくしらむ山に月と雪とのひかりあり
冬の月とぞ見えける

源雅光

あらち山雪ふりつみにけりてもあらしの夜の月かげ
家経朝臣の桂の山荘のさとしの光り

ひかりしうなかさくけつ木をよるかも

康資王母

榊葉やたちまふ袖のおひ風になびかぬ神もあらじとぞ思
神楽をよみ侍ける

皇后宮権大夫師時

神まつるみむろの山は霜がれてゆふかけてまつ榊葉ぞすき
みどりときはなりける

三宮

清き瀬にながれもやらぬ雲の波あしまがくれに
あし鳥ぞとまれる

前中院六条

中々に霞めるよひのかきくもりてやみ夜も夜さむまさりける

池水春といふ心を

前中納言行

浪枕いかにうきねをさためまし池の汀のみきはにかき

鶴しける

修理大夫顕季

さしみちしひ社やかはれるのうへにさくらのまつ

依花待春といふ心を

内大臣

何となく年のくるるは惜しけれと花のゆかりに春そまたるる

年の暮に人に代て詠る

藤原成通朝臣

人しれぬ暮ゆく年を惜しむまに春いとはやくなりにける哉

霜月の十日ころに摂政左大臣家にて冬の歌よませ侍りけるに

まちよとしのくれをとりてかへる

藤原永実

かそふれはつもる年こそ惜しけれとまたれし春は今年なりけり

崇徳院御時後年内に立春をよみ侍りける

三宮

としの暮いつるをまちし年の明るらん

いふまじき言も年をかさねて身と成つるもハことはり

中原長国

年言ぬとかり社ハさま道の我身の上にも積りけらしい

中納言国信

何事を待とハ道にあかされて今年もとゝに成りにけるかな

金葉和歌集巻第五

賀歌

長治二年三月五日内裏にて竹不
改色といふことをよませ給ける
堀河院御製

千代ふれとおもかはりせぬ河竹はなかれての世のためしなりけり（萬代イ）（かゝみイ）

郁芳門院根合に祝の心をよめる
六条右大臣

萬代はまかせたるへし石清水なかき流を君によそへて

堀河院御時中宮御方にて遠(?)清(?)の時松
契遐年といへる事をよめる
大納言俊実

[illegible]

禁中翫花といへる心をよめる
中納言実行

九重にひさしくにほへ八重桜のとけき春の風としらすや

花契遐年といへる事をよめる
源師俊朝臣

萬代[illegible]桜[illegible]限[illegible]

橘俊綱朝臣家の歌合に祝の心をよめる

よめる

藤原国行

よのつね我君之社にいのられ君か千代をもまもれ神の道

百首の中に祝の心をよめる

源俊頼朝臣

春の代は松のうへに重ねて我身の海とあるまし

祝の心をよめる

大納言経信

君か代のあとをたてて行吉田の雲をそへしとこひ侍

後一條院御時弘徽殿女御の哥合

祝の心をよみ侍ける

永成法師

君か代は末の松山はるはるとこす白浪の数もしられす

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池

上花といふ事をよませ給ひける

堀河院御製

池の面に底まて白く花さきてみるみるきよき千代のためしに

大嘗会主基方辰日参音声ス敷

山をよめる

藤原行盛

尊きは敷の山に打よせて海の道さへ代とすみける

悠紀方の鈎月の里をよめる

藤原敦光朝臣

日影さすとよのあかりにてらすらむ明日の里は光さしそふ

已日の楽の破は雄琴の里をよめる

松風の雄琴の里にかよふこそをさまれる世の声ハきこゆれ

崇徳院の御時の大嘗会の主基方備中国二万郷をよめる

藤原家経朝臣

ミつき物たえすそなふる二万の里人かすも君かよはひを

同国いか井の里を人よろこひてよめる

高階明頼

万代のためしにいる井ほりおせて民もたすくる君か御代かな

祝のこゝろをよめる

皇太后宮肥後

おさまれる風のそらにたちのほる雲ものとかに君か御代かな

花契遐年といふ事をよめる

大宰大弐長実

花見ることしもたえせすあかれハ御まつ風吹く君のよはひを

摂政左大臣中将にて侍りける時春日祭使にまかりけるに周防内侍女使にてまかりけるに為隆行事辨にて

きみのめくみにつかへしもせむ

周防内侍

いかはかり神も喜しく三笠山二葉の松の千代のけしきを

題しらす

藤原道経

君か代ハいく萬代かかさぬへきいつぬき川のつるの毛衣

宇治前太政大臣家の哥合に祝の
こゝろをよめる

中納言通俊

君の代ハ天のこやねのみことより祝そ初めし久しかれとハ

大蔵卿匡房

新院の小弓あそはしける藤花久匂といふ
ことをよみ侍ける

大夫典侍

藤なみハ君か千年を松にこそかけて久しくみるへかりけれ

祝のこゝろをよめる

源忠季

君の代ハとみの小川の水すみて千年をふとも絶しとそ思

實行卿の家の哥合に祝のこゝろを
よめる

藤原為忠

[illegible]君の代を天照神もまもるらん

前中納言知く出へまいりし世ひろまる哉

家のうちて行はれし六条右大臣殿

まつりつかひしまつ　宇治前太政大臣

雪積る年のしるしにいとゝしく千年の松の花さくそみる

六条右大臣

積りくる雪積りくる君か代は松の花さく千たひ見るまて

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心を

よませ給ける　後冷泉院御製

長浜の真砂の数も何ならすつきせぬ物は君か御代

松上雪とよめる

源頼家朝臣

万代のためしと見ゆる松の上に雪さへ積る年もかさねて

前斎宮にてうたあはせし侍けるに

おほくのはしあはせして

ひさしき祝の心をよめる

源俊頼朝臣

年ふれとよさのの浜の君か代にそへつくさん万代をと

金葉和歌集巻第六
別離部
藤原範永朝臣丹後守にてくたりけるに
はなむけし侍るとて
大納言経長
君しもや花の宮この色をとて黄葉にいそくこゝろハ
なへし
藤原範房朝臣
まよひ黄葉のみおもひやる心もさえも流れつゝ
志けまさ帥に成てくたりけるに
むまのはなむけし侍るとてよめる
堀河右大臣
ゆくへを惜む別と思ふにもさこそ涙のかゝる袖かな
題しらす　読人しらす
わすれなん我にこひしき山をこえ
師輔つれて人くたり行きけるに
くらまをのまにまに上東門院に行
もろ人はつかさしたる
前大宰大弐長房卿
君さの袖よ独わかれし世の涙なしをさそふ
見とも涙にしてもまつらせ

のひまつ　上東門院

別れとゝふにいつの頃くらんけふの人さへ袖そぬれまさる

源公定の大隅守になりてくたりけるに

時月わかれをしみよ別をおしみてよめる

源為成

遠からは松風のまもとまれかし山てさへ秋風の月

對馬守(従イ)にてくたりける小槻のあきちかゝくたりける

もとめ時つかはしける

藤原資業朝臣

あまの住雲のよその岸とても波ゆかりの雲のみゆるまのこゝろ

としふれはいかゝまたれむとまりしを

から時人をもむかへかし

行まつとよめる

参議師頼

いとゝ海士のつえにも松島の人のまつとたにきく

源行宗朝臣

結ひけむ契りをたにもわすれなは我身をなとか恨さらまし

百首哥の中に恋のこゝろをよめる

中納言国信

なきさにたつる名のはかりかはあらぬ名にやの情まされ

菅原忠基俊

秋霧のたち別ぬる君により晴ぬ思ひにまよひぬるかな

橘為仲朝臣みちのくにへくたりけるに
人々しまむけしけるによめる

藤原実綱朝臣

人はいさ我身は末になりぬれは又あふさかもいかてまつへき

菅原ありさと

遠さかるの人船よわかれ見故郷を思ふ心はまさらん
経年のよゝてつくしへくたりしそはら
ちりしもなう

中納言通俊

さしのほる朝日に君を思ひ出しつらく月よ我をわするな

かへし

春宮大夫公実

知日ある月のゆくつきも君を忘るゝ時はあらしなれ
思ふらのくまへかからもろよあさの
関よりこゝやくつかへしもう

橘則光朝臣

我独いそくと思ひし東路に〇の梅は咲くらんよあら

金葉和歌集巻第七

恋哥上

五月五日あやしめける女のもとへつけて
つかはしける

小一条院御製

しらさりし袂のうへまでぬるるかなあやめ草ゆへかかる恋ちに
女のもとはなかれしかりけり

大江公資朝臣

しのふれと色にいてにけりさりとてもいかさまにせし人すひきも

暁の恋をよめる

神祇伯顕仲

去ともとたのむ限は恋しさまてに名をしらぬ
流されはなれ女のなけきつかひしもの

春宮大夫公実

これもしくとひはまさと草枕ひとよのへしかはいまはなき
須羽のうらのとよめる

としよりの朝臣

我恋はおほみの浦の清かはてのせきなもなくて
顕季の家にて人々恋の哥
読せけるによめる

藤原顕輔朝臣

年をへて現のかひはあまれともなきさこそ恋をも命なりけり
女のもとへつかはしける

源雅光

あ金はいひもとらぬ恋の糸をもしらすにかくとかや
従二位藤原親子家双紙合にこひ
のこころをよめる

宣源法師

今はつらきまてひさしくそえなきまてうき人のゆかりと
とまり
とい

大宰大貳長實

おひやまた波の浦にそ種つつき忍ひて摘はなき蒲を
物いひける女のかたへまかりてかへる
あしたによめる

津守國基

物語のみ詞も枕まこつまて春きはてまゆはらひて
こひ
たのしからし人しれず
恋とそよ世にすなき涙川つまなき人を恋つつ
くれ
今はさしも恋の思ひのかなしさに恋しき事は忍ひかねつつ

中納言雅定

年事は身とかはれ後の涙は云ふかひなきものなりけり

あまつ空に行かふ人の思ひて立まよ
てわたしせぬ小舟なく渡りてまとの
日つかふしまかな

春宮大夫公實

思ひやる逢瀬の気色行は渉ましほかならず
顕季卿家にて織女心をいふ
こゝろをくみかね

少納言教安

七夕は文こし秋も秋も逢瀬も去年あまた
寄名恋といふ事をよめる

源師俊朝臣

水の面の風にさゝ浪たちかへりさきさもあかぬ袖
寄菱恋といふ事を讀る

左京大夫顕輔

菱ふかきまよひてよそにも秋は現にいつまでも
きよしつに

中納言顕隆

白雲のかゝる山路をたづねてもいかにしても
中納言俊忠の家にてその心をよめる
ぬるとはいはぬかな

源顕国朝臣

逢ことのまれなる秋にしられけり思ひやいつとさためなきらむ
思ひわひぬる夜はのあはれを

中納言実行

岩河の上は木のもとよりも月まちて下にすみける人そあはれなる
月をまちていたる事とはなる

藤原基光

諸ともに遠き人のおもかけもまちまつ秋風の月
影しらす

読人しらす

月よりもみるまちえていたるまてはいつかはしらし人のたえて
此ものの人のなか中にまつりになれて

すてつるを思ひて月をかうちもろ夜はひ
流しらしてまゐる

藤原節房朝臣

面影の秋すく男に思ひわかれて雲の月を詠とまれ
さらに事なくて久しくそことさまにまかり
女のもとよりいひおくりける

読人しらす

あはれやすてにめくり逢ひける月のよるまたあはれ事なひえたる
文もなくとたえていひさすまかる人なる
許まい云つゝしまかる

内大臣家小大進

かきあつめておもひしるしは紅の筆のすさびといひてこしかな

實行卿家の歌合に恋の心をよめる

長實卿母

あさましやさらぬかけ橋たえまつまにも恋わたるかな

藤原道經

恋侘ぶとき神や流れあふ涙の川の井せきなるらん

かおる女房母

流ての名にさへたつる涙川人めつゝみをせきそかねつる

影しうす

皇后宮右衛門佐

涙河袖のゐせきも朽果てゝよとむかたなき恋もするかな

源顕國朝臣

女の許につかはしける

かくとたにいはまほしきを思ひわひ思ひしれとや我人に

藤原顕輔朝臣

恋そめしそのかみ関守我身かは我かたならんかたしよ

大宰大貳長實

命をはかなきものといひしかと年ふるまてもまたれけるかな

後朝のこゝろをよめる

源行宗朝臣

待過ぬる年ひよあひそめし相思ふともしらぬこひしかるらん

堀川院御時艶書合によめる

春宮大夫公実

思ひあまりいそすむ奥山のささこむ岩の下水

恋のこころをよめる

藤原顕輔朝臣

年ふれと人もすさめぬ我恋や朽木の杣の谷の埋木

わかおもひしき人をとふひもなそよめる

よみ人しらす

いかにせむ数ならぬ身にしたかはてつつむ袖よりあまる涙を

院の殿上にまいりて世おほくしまける

時御遊にまいりて橘の本に露ちきる

ふれとしらぬ

大宰大弐長実

終夜草の根にとく露ハなき星こそかかれ

恋のこころをよめる

神祇伯顕仲

恋をせし川の逢瀬よ神かけて七瀬の淀によするなみ

なみだにそてもぬれいつしか見えしなれなかりける

人のためにも文をおくりもせされはつらし

しきり　　さうし

わか宿の風のけしきはすゝしくてよそにもきくやなつのよな

国信卿の家にて歌合せられけるに

源俊頼朝臣

よとゝもに玉ちる床の枕には人をまくらにしらぬなりけり

五月五日まりすくれて出ける菖蒲をみてとて

いつゐをひきつゝきてたてもたてさることゝひつ

うらしきかな

相模

あやめ草わか身のうきをさへたに、いつまたけふの袖にかけ

同五月ふたつありける年人をまつとてひけるか格

今日きくやなきにしもあらぬはなれはなめ

橘季通

まこともくるしきちにてあやめかかりすくるも五月まち

人のりきよ流れゆくらしなり

神祇伯顕仲

よるつゝもむかしにかへらぬ涙のうきにぬれる袖

たゝすいひくえしらぬを人の許に

いひつかはしけり

さうし

わかつゝむらきえかうまのつ人のなかもいのちなき

人を恨てつらしといふ

藤原惟規

沈みても我名をかへすなみた川人を恨し
女の許にいひつかはしけるにと乗はかくれ給
と申されは返事にもおなしひとへにいふ
とひしをしかれはいひつかはしける

藤原正家朝臣

秋風に吹返されて葛のはのいかに恨しものとかはしる
故ひ給ける人のおもひに申させける まうでくるイ
ことのわかれにいひつかはしける

藤原高教母

ちさとの人は身を捨てしんおもふなそとまりの社儲れ わりくイ もイ
長實卿の家の寺会に来ぬをとかめ

藤原忠隆

花ちめる間のあはれもしれぬ
人よりて

春宮大夫公実

白菊のうつろひはてゝ
人を恨てつらしといふ

藤原惟規

時風にさそはれてちる

ゆくさきまてもかの人のわすれしといひしもの
右府家内的
浅ましやわかきよき恋の身なからうきこのよにあらまほし
逢ぬ遇恋よそふる事をよめり
大宗大史卿忠
一夜とはいつちらし遁何行のうれしさと社たの卿の
後恋の家あらし恋前十首人にまかせ
ませ給もつまらしひとくあまたのうちより
事とよみ給ふ
皇后宮式部

あひみてのゝちのこゝろにくらふれはむかしは恋ましき
実行への家の折合に恋の心をよめり
源俊頼朝臣
うつゝまて恋ふころ我身ならひ思ふわかまゝの物かたり
恋の心をよそへよめり
藤原成通朝臣
くれなゐの堺も人のもとをとほしにかくれなき
摂政太政大臣
いなみまたしたを妻の姿をも陽のさきの恋を人にしらる
かくしひとかくの人のあはれそよかりけれ

絶しりけまきよつゝらしもの

白河女御越中

紀しき道を絶しと歌をんとひ終てもこそしまちなと

我のなと人としるらるゝかな

律師実源

命とてしかまても続しけれは中すれいさ声の出し入ちれれ

皇后宮美濃

昨さ経て続けんあやきさのなれ今はこれよりたもまる

摂政左大臣

摂宮忠を

月をよみ光更ひの花帯花玉あつさくの摂咲しせと

堀河院御時艶書合によめる

皇后宮肥後

思ひやれとはて日をふる五月雨の独やともりの袖乃雫を

皇后宮にて人々恋歌つかうまつりけるに

まうよ語女書忠しさ事を

美濃

これもまた人の心のなかはしまれはつる物の玉札

人こそ忠ひさしまもせ絶りたまよ人けり

かくりく

摂政左大臣

ひさし浩ちの末まとゝ寄れたまうさゆまとゝふ人に報まし

寄三日月恋をよめる

菅原為忠

宵のまにほのかに人を三日月のあかて入にし影そ恋しき

忍ふ恋をよみ侍ける

よみ人しらす

恋わひてひとりふせやによもすから落る涙や音なしの滝

雲居寺のうた合に人にかはりて恋の心を

よめる

三宮大進

すきにける年月をなにゝ思ひけむいまそ恋しき人のためには

寄花恋

摂政左大臣

あさ臣人のこゝろにそれぬ花もとゝまれぬゆへ社なれ

百首歌中に恋の心をよめる

修理大夫顕季

我恋はうらかれしまゝに玉えの橋ならぬ隠しゝ知人もなし

摂政左大臣家にて恋の心をよめる

源雅光

あやなくにいつはしのゝまさみかえにかくされてゝいるまの

寄山恋といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

恋侘て云ひ入る山のまにまに出る月のつれなかりしを
つきなりける人の許よりおこせたりし筆を
かくくつかはしける

藤原公教

うつ縁にあてつる袖は涙にて流るるを筆と思ひ出て
摂政太政大臣家にて寄花恋といふ事を
よめる

源雅光

吹風に絶ぬ梅の花ならもとめて来るは涙なりけり
権中納言俊忠の家にて恋十首人々
よみ侍りけるに来不逢恋といふ事をよめる

源俊頼朝臣

思ひ草葉末に結ふ白露のたまくきてハ手にもたまら
女を恨みてつかはしける

春宮大夫公実

苦しさは君か上とそ思ひやるさは我身よりさらにものを
重服になりける人の許へまかりてこ
むといひけれはつかはしける

橘俊宗女

立かへりさりとも逢瀬あるへきを捨ても身をは従
恋ひ名を人にいひたちてよめる

藤中宮上総 秋之下

皇后宮女別當

夜もすから瀧の水上もやくもらむ花にまかふ白浪

花の色をよくよく見れとあかなくにありしその色もあかぬ名残

金葉和歌集巻第八

恋哥下

初恋の心をよめる

良暹法師

うちはへてはこなをとるやとて恋れ定めなきませつゝ

江侍従家歌合に海橋立恋といふ三の影

をとこよませ行りきうにとき見えて

人こそれさまうらなりけれ三の影を

ひとりまもりつゝさ

藤原範永朝臣

恋渡る人に見せばや松の葉も下紅葉するあまの橋立

待恋の心をよめる

源師俊朝臣

きみ来ぬと思ひもしらで宵のまはしばし待こそ物思ひけり

月増恋といへる事をよめる

内大臣

いとゞしく侘にけるかな月見ぬよしも思ひいでゝ

恋のこゝろを

藤原顕輔朝臣

恋侘て寝ぬ夜積れはしきたへの枕さへこそうとくなりけれ

鳥羽殿にて歌合に恋の心をよめる

藤原仲実朝臣

よそにのみ袖はぬれけり我思ひとなみの瀬によするしら浪

暁の恋といへる事をよめる

中納言雅定

逢事をいつとしらで夕附日入山のはもうらやまれけり

恋のこゝろをよめる

右兵衛督伊通

山の井のいはもる水に影みれば浅ましげにも成にけるかな

皇后宮にて人々恋歌つかうまつり

けるによめる

太宰大弐長実

こひしさの思ひ出ずるにはかなくもあはれとみえし人の俤

恋のこゝろをよめる

皇后宮権大夫師時

人ごゝろあさましほのの浦人は泣ぬれ衣かはくまもなし

堀河院の御時百首歌よませ給ける時

恋のこゝろをよめる

権僧正永縁

思はんと頼めし人の昔にもあらずなりゆくかはりはてぬる

恋歌とてよめる

隆源法師

くるしさもさもあはれにもまさりけりいはましものを恋はかくこそ
若人家時に遣してよみけるを恨て
いひつかはしける

右中弁越後

人心浅沢水の根ぜりこそかりにもつまは逃れ
後恋で家あはせに恋歌十首人々によませ
侍りけるにてこそてにしらせける
よめる

修理大夫顕季

わざとしこの歌を聞しかば恋する家に詣たりける
我をは遣しになりてことしく人の許へまかり
ぬときこえてつかはしける

読人不知

さよりやとひとよの山桜白ひまされつ花をみるとて

郁芳門院根合に恋の心をよめる

周防内侍

恋侘てながむる空の浮雲や我下もえの煙なるらん

人を恨て五月あやめにつけてつかはしける

前斎宮河内

逢事はひさしくなりまかわすめまてかりそめあまた事と知られ

恋のこころをよめる

大宰大貳高遠

涙さへ思ひもよらぬ身の程に逢さいてもえそはらて

恋しけれ

前中宮上総

それのみは契りおきてもあらましを人を恨むとおもひけるかな

恋の哥とてよめる

源俊頼朝臣

忘草しげれる宿をきてみれば思ひのきより生ふるなりけり

人とかくしかくまく人しれ

今よりは思ひもたえじいかにせむ心にまかせぬ命なりけれ

逢不遇恋といふ事を

左京大夫顕輔

思ひやれ逢見し夜はの嬉しさにつらさ増りて恨みしは

人を恨むる心のうちにたえぬ命をかりもせ

まことしよめる

読人しらず

わすれ草あらなに思ひ出でて命をたえし人を

女のもとにつかはしける

藤原永實

ましばふも荻の间よりかれ行く逢ことをきみもしらね

家の哥合に祈恋を　　中納言国信

年月も祈る計にこそつもれとも涙ハ人にそ見えさりけれ

たのしけす　　身人しれは

逢事ハ祈計そやまも遠き杜見えそ人に語るな

大納言経信

声たてゝ帰すくるらん何の鵲もかけしもまつ我恋

藤原忠隆

我恋ハわすれの山の麓に落つ雲にまかせて

みさしもえなんさくらの月をそなる

播後宗女

いかにせん歎の行衛恋しきに来ぬまの月そ流れ出にけり

此中はまつ人の名もしらすとも恋をもせさりきを

ましてたれかはしらまし

前斎院肥後

芦分のこゝたゝこもりぬる恋も人の目つましきかね

恋のこゝろをそあり

左兵衛督實能

我恋は年の多きあはれとも人にかくてまつ

待ちまつ歎を行まくにさくら事なく

いりにきつ梢すきつる風すしこれよりもれは
ときこくしらめかな

春宮大夫公実

時雨る雲井のよそに遠けれは我そ身の齢にあまれ
冬来しらぬ事を

藤原成通朝臣

水の上にうき白雲の行すゑのつらさやはま人のつらさ
多聞とふことの葉をしのひつゝしのはれなから
まなこはつれ月のあはれなる夜
しらつ

権僧正永縁

まつ人のたえまよりこそ月すらはめかりて秋を影にかへて見し

寄水鳥恋　摂政左大臣

冬来てもすみにむすかる葦鴨のうきねをしつゝ人やいかにと
人を恨くしかな

盛綱母

さのみやは我身のうきに嘆くへき人のつらさを恨みならさ
摂政左大臣家にて述懐の心をよめる

源雅光

すみそめの袖の涙もいかならむいかにやとはむ秋きを
うらやましき人はおもひにつけしむかし

思ふ事侍りけるころ

前河内守甲斐

とへのなを三橋の山なれてそのほとふるをおもひきや
こゝろ人のこひしさにまつきえつへけれ

よめる

橘俊宗女

時しや岸にもきえぬこゝろにてせをもさらぬてこひ思ひ出

皇后宮にて山里思といふ事を読る

左京大夫経忠

山里はおもひのほかにてのそとしらぬ人をまつ哉

山の家合に思ふ心をよめる

読人しらす

玉さかに我をあはれと見えて逢ふをもまとの現なりけれ
いかにしてこの人のためもあかぬむさしの
そむく人の中よりかれはよめる

中原章経

[illegible]
俊頼人のあはれかりつかはしける

権中納言資仲

[illegible]

返し

俊頼人あはれ

玉さかに浪はさらに浦くは立まはたゝあまのうひかたなく
思ふ身のこゝろをしるらん

源親房

折にふれ世をうきにこゝろのかゝるにのこれる涙よ
物思ひ侍らぬこゝろ月はありあけの夜
あかさりし面影のみやうつりそひてそのまゝに
しるらん

摂政宗女

つれなくも思ひそめつる人をおもひて月の影さへも
さらしれ

上総乃侍

涙をや涙のうへにまかせてみはてぬ夢をさへしらましを
そのへにかりもそむ道にもしたかひしたまふたた
やまのうとともかたれはせ行きそれ人

上東門院

行きてはありしをとのむ中とひとひまかる
こゝろていかなるうらしるらん

源縁法師

名をえられて見るも君なかりしいはてなくあはれなるらん
思ひこゝろをしらなん

民部卿忠教

思ひ絶てわすれぬひの涙かなしき花の露にかなしき
女のかたみへつらしきもの

大納言経信

逢事ハいつともなくて哀我しらぬ命に年をふるかな

ものいひける女房のもとにまかりけるにさかしらする人ありてかへされてよめる

藤原顕綱朝臣

人しれぬねをのみなくとしる人のなき衣のそてあまるまてこそ見しかと（をしへ／なし）

堀河院御時艶書合によめる

中納言俊忠

人しれぬ思ひありその浦風に浪のよるこそいはまほしけれ

一宮紀伊

音にきく高師の浦（はま）のあた波ハかけしや袖のぬれもこそすれ

くれあひてまつしるとものあらきのふ人のちの世の月まてそ見てこそさらまし（を）

よめる

摂政家堀川

契りおきし人も梢の木のまより頼めぬ月の影そもりくる（かゝ）

忘らるゝ人のゆくへのつらしきぬる

江侍従

めくりあふかきりありけり涙川流てやまぬ心なりけり

国信卿家歌合に物思の心をよめる

源道昌

かみ社は岩手の杜の下紅葉多くは夢は道は数にもあらぬ

宮のわたりにて出羽弁のもとより帰り侍

りける人に送りたりて侍りける

出羽弁

遣りてはかくれし岩にのみ契りさしひて来しにも侍

るかし

大納言経信

冬枯の霜まで雪のならし影ちらかなる遣りやと

またこそもすゝめ遣りて年を経る

後冷泉院二條

御来なくぬきこまりつるかくれまにはかなき

しのぶれど限るまじくと思ひけるかな

もろ人の見しまゝにせられは読る

読人しらず

人しれず思ふ心のほどやなけれとまた見る社

法性寺関白

源俊頼朝臣

あさましの事をはかなく思ひつゝ

年比想ひもろ人のこゝろにてまたれさりし

まとつかしける

よみ人しらず

ちくらはゝ浅さはともをしへはあさき山河のみつ
たのしゝは

かくさしや細谷川の悍の影ならぬ水を流と
男山なくさめみる人は絶まなくしのふらん
行末さへにつもりしをかな

左社六一夜かりの称をうけすかく千丁年もみ方をかすらん
後頼兼氏こゝろを

藤原顕輔朝臣

あさち海の羽のさひあかく引つれくさものすみ
人のわしらはせあらく恨て袖ぬらすかな

とふせとやおもひしいそせとりをれはゝある

皇后宮大夫

うらむるとあらしのあしひき猶まよふみちあまの袖ぬらすらん
猿沢来しひとつてかとあり

修理大夫顕季

来さとはきもかゝめや猿して山の滴よ袖ぬらさん
人のうきまゝくこゝにもしてかうりまれ
はよある

一宮紀伊

うらむれは影なくみ月夜明わすらぬ雲まちる男も
旅人のゆく行きの法門をそうりすてて出そ

女の許にまかりてよめる

藤原永實

三ヶ月のおほろけならぬ縁さへあれや出し雲の上より

周防内侍去てしくなりて後ゆかしく

はこしいつまてありし中まれんしよめる

源信宗朝臣

あはれなりよをへしものを秋風も秋来るはみなおなしと人のみ

なきさ君ともしらぬ事をよめる

左京大夫經忠

人しれぬあはれを誰にかたらましおもかけのみそ袖にやとれる

人を恨みてよめる

大中臣輔弘女

あらぬ心の月はくもらぬと見えし秋のしらまし

三井寺のはしき人に思ひしまつらんによめる

僧都公圓

きえし思ひ人のことのはも我のみしれし社男きはむしたま

かへらひまつ女の許よりかへりし中

またかりつつわりしまつらしまれと

ある月夜の比まちて侍りける

よみ人しらす

五月雨は空とひとつの光のみ降まさりてなかなかにみゆらむ
とし　　左兵衛督資能
三つまさむ名にしおはゞ五月雨もいその岩ほとやまさるらむ
たゝしゝ　ふりん人云ふ
あま雲ゐの風の音せぬ雨は国々にのこりけりのなかりけり
足引の山はまつくされたりつゝさはまさり草
津の国はなにはの人をわくさ河あま社つくさせて岸ゐてゝの
近江にてふもとは霧にこめられていつもは霞に雲まか煙
笠とりの山はくもまつ身はまれにともなりもとより我ならは
ミくまの山藤はまつりとかへて来社まつの影さしやされ
こゝつしの頭をいつふせまえその来よりかへゐにとらも
わたれさゆしも多くなかれの頭さを山とこゝはの原
ちとまりや本は下依の岩かいてゐ人の影をそへる人
まかつめつてゝのゝさの影まさしき頭をはかなき家
逢事は今はなれおもひそまて来まゑ人社に逢
あすはなゝかりつゝいつのひまのひはひ移りさゝをしのび逢
年ゆはわりとふはすゝまてひ山来はてありて人と逢
逢事の今は成れ思ひのゆくへやまたん
何すは飛のその板部さまあつまく年の夏
来る道山のたりされあれは我よとふかくわかり

やまといつゝとりさまにちりのちを思ひまさるれ
たのしけれやかつ人のありもありわかくまて心はちりそ

寄衣恋といへる事をよめる

前斎院六條

逢事をとふ衣錦のはてにおほきさに胸のこゝろのわかなれ

摂政左大臣家にて恋心をよめる

源雅光

数ならぬ身をうち波のたかしともいはれぬなかも恋わたるかな

恋十首人〻よみ侍ける時

いつとしもあれ

修理大夫顕季

玉津嶋岸うつ波の立帰りせてはてなんなこりかも
恋の舟しるへそしらぬ

春宮大夫公實

あふことは舟人よりもこゝろくし舟はさすかのはなれし跡なれ

顕仲女

ひとつ津のさすらふ恋をせさりせはあはそ関のまもりかくなきは
こゝろしるありし
ありもの人に語りける女

内大臣家小大進

かく計恋は病になりぬれとあはれさけてもおもはぬはかな

摂政左大臣家にて時〻あそひしにつ

おもひをのぶる

源頼国朝臣

我恋はしのびはてゝもしらせねば絶まもなくもくるしかりけり

恋の字人ゝよみ侍りける

源俊頼朝臣

ゆふしはやこはゆめのさまそとも恋せよといひし生れかはりけり

夢恋とよめる

源行宗朝臣

つれなさにひとかたならぬひとの袖ぬれてそしのぶこひしかりけり

後恋ゝ家にて恋の心十首人ゝよませ

まつりしほどにあはれなるらん

夢をとよめる

源俊頼朝臣

あはれとも嬉しや物思はしき夢の世にたのみしもせん

金葉和歌集巻第九

雑部上

むかし道方卿にくしてつくしにまかり
て安楽寺にまいりて見けるみち
のむめの我任にまかりて見れは木のす
かたは同しさまにて花の老木になりて
ところ咲たりけれはよめる

大納言経信

神垣に昔わか見し梅の花ともに老木と成にける哉

山家鶯といへる事をよませ給
ける

まうけのきみの

摂政左大臣

山里もうき世のうちをはなれねは谷の鶯音こそなかるれ

円宗寺の花を御覧しけるに後三条院
御事なとおほし出させ給てよませ給
ける

三宮

桜花をしみし人の年ふれは花は我身の色そうつれる

花見御幸を見て妹の内侍の許に
申つかはしける

権僧正永縁

我末は道とるまてをしらねとも今いく世の人まもるらん
之し　内府

いく世えて後の積りやみる道の花はなほ道を
大峯あくることひとまもるさくら花の
咲からりまうをとこそてしるかな
僧正行尊

詠歌は家のことなれと山さくらかはらぬ人の道
堀河院の時殿上人あまたして春
見ありきまうるに仁和寺行宗朝臣
河のとよめく懐紙やわかて尋くる待

まれなつらんとて人まをきにけり
ことなき
源行宗朝臣

いく世にか我よりのちの人の花をまたはやみて
山里よ人てまかりくもの哥よまれ
になりける
源定信

昔人の吉野の山の桜をおりまよりて吉野標
後三条院の御時たれか世あらしましく
のちの文のとしの春盛なかりけれとこそ
よみけり
右近将曹秦道房

これほとにあかぬ色の咲まさり花桜ちりぬは思ひからまされ
われさきのしのはしにけりよしの山
峯のかへすしられはしあり

藤原雅仲朝臣

年へても尽せぬ桜木はたえなる心にまかせてそひき
花人わかちし時条の陰侍しなまかり
よ右中弁俊家かもとにてつかうまつる

藤原惟信朝臣

山吹も盛過ぬの花すれて雲井の桜折てそ見しき
隆家に太宰帥にてひとりて後の

よろひ青椎の社にて月ひらるのもかけ
神まつりのりし杖のしたわれてのあり
かりにきもとをてしあり

神主大膳武忠

千早振かみの杖のにとこめのかね我をそきえん
源心府よまかりて初し山の浦
ふりそろにやまいうみすみ年まて
中まれてしあそ

良暹法師

年をへてかくのみちからひとこゝろのさみくちかゝらむれ

藤原基清の家人あしくかうかうかへ
いりくおりまうれし文の日つかうまつる

藤原家経

思ふ○きさいの宮とや祓ひてん通ふ霞ゑそて
一乗寺王寺にまいりてせかひく日来
御念仏せさせ給ひけるに清とものくく
侍者よもかうしく前後もうかよみける

源俊頼朝臣

いく千代花咲くやうの何年の春を御代の御をかけ
田家も苗とりてそよみける

中納言基長

まきもかお山田の穂の末春まち今いく秋ならんと思
仁和寺にまゐりたまひけるにはかなくなりにさそ
はかなくなりたる人のうちなくなり
かれしままにせよとなむ

三宮

うちしくも見えぬ綿のよしさる山里の細谷河のさはきさえ

大峰の笙の岩屋にてよめる

僧正行尊

草の庵を何露けしと思ひけむもらぬ岩屋も袖はぬれけり

良暹法師をとふらふ事ありてまかりける
ゆりこし一日にまうてきこそ又へりける
かへりきりきれたしひつうしまつ

律師慶範

春のにほ日つくしは道を文紀すにとこ見えん

對山待月といふ事をよめる

藤原正季

これやこの山のはいつる月をのみまちてもやみ陰

山家にてそらの月をよめる

僧正行尊

木の間より月のかけをみるも誰の秋とひあへき

山寺にて月をあふかりけるに縁れたる

ことなく月のあらはれたる

平康貞女

いそのかみ村の月のかけを道ひかり渡すは

宇治前太政大臣時の家

月の家にまなせたるものにましていへり

これにまつらしまつ

源師光

春日山家にて池月影まされる松をよめる

僧都頼基光明山にこもりゐぬとききて
つかはしける　　　橘能元
うら山しうき世を出ていかはかりくまなき峯の月をみるらむ
返し　　　　僧都頼基
諸共に西へや行と月影のくまなき峯をたつねてそこし
郁芳門院伊勢におはしましける時
わかれさまにくたりけるに鈴鹿川をわたりける時によめる
　　　　六條右大臣北方
すゝくらの数にもあらぬ鈴鹿川出てしまりける
仲正の女皇后宮に初てまいりたりけるに
まいりて琴ひくときこしめしてひかせさ
せ給ひけれはつゝましなからひきけるを
人々を聞てくちすさみにひのやうにかく
いひかけゝれは
　　　　摂津
琴の音や松吹風にかよふらむ千代のためしにひきつへきかな
　　　　義源
嬉しくも秋のみ山の松風にうひ琴の音をかよへつるかな
月のおもかけ夜人の琴ひくときて

てよめる　　内大臣家越後

雁とみし月の影あかくもりかねたえぬ雲まにいくへの影

伊勢國の二見浦にてよめる

大中臣輔弘

玉くしけふたみの浦のひゝきこそまさこにあまる松の聲

宇治前太政大臣布引の瀧見にまかり

りけるともにまかりてよめる

大納言經信

白雲とよそにみえつる足引の山もとゝろにおつる瀧つせ

よみ人しらす

天河是や流のすゑならん空よりおつる布引の瀧

選子内親王いつきにおはしましける

時女房に物申さむとてしのひてまいり

たりけるをさふらひともいかなる人そと

あやしみまうしてとらせ侍りけれハ

紙に書てさしいたせ侍ける

藤原惟規

神垣ハ木のまろとのにあらねとも名のりをせねハ人とかめけり

郁芳門院侍従に物申しけるとき

六条右大臣少将ありけるころにかよひて侍

まつ時にしひけることのこゑ作のこまこさ
こゝろをよせてよめる

六条右大臣小君

秋風のおとにたにゆくさはしらぬまことの
前斎宮伊勢におはしましけるに
寮頭にてありしも見まゐらせつの頃ゐの井に
のぼりにまゐりて頃ありて有けるを書とも
わくゐまでまゐりてさかりて書つけ侍
けるまめすいのひつゝにしける

前斎宮内侍

にしとも〳〵てまかりにさうる歌よみにとられて侍けるを

和泉式部保昌に具して丹後国に侍ける頃
都に歌合のありけるに小式部内侍歌
よみにとられて侍けるを中納言定頼
つほねのかたにまうてきて歌はいかゝ
せさせ給ふ丹後へ人はつかはしけむや
使まうてこすやいかに心もとなく
思すらんなとたはふれて
立けるをひきとゝめてよめる

小式部内侍

大江山いく野の道のとをけれハまたふミもみす天の橋立

百首哥の中に多れるをよめる

修理大夫顕季

うきねの夢ありをハ剣はし青の人を文乃んましくし

百首哥に恋の心をよめる

参議師頼

さ夜なかに出ハ出しらぬのあさかの浦に恋してそ

この集撰しける時哥こうまてく送りそ
よめる

藤原顕輔朝臣

家の風ふかぬものゆへはつかしの杜のことの葉ちらしはてつる

志賀あたりに雨のふりけれハ月かけなきに
きのふにそみをとしいふ梅をそうつしつくくへし
やとすりもしなくのをちくつかとして

平康貞女

いつくにか摘入江の浪に立渡りきみそさそこの命にもなる
之し

むすめ

あるところにわすれかたき人したりけるに神な月にはつしくれの頃

和泉式部石山にまいりけるに大津に
とまりて夜更て聞けれは人のけはひ
あまたしてのゝしりけるを尋けれは

のきはのめつらしきをしけ行かたりけり
きつねとぞすくしあり

和泉式部

これやこの松原いつよさり流してけふまて里にたえ行
公実との御りにも乎かりつまきもつに行つ
さりをまとハあ辰にまきかりもつ小町とさり
てきつひに足ハあさりつてこれにそ
いくにかりかのゝ海りてちとふる
されし時房まうてこまくとりつとり
をまとハあくつろく院の御ちかそく

久方にいひをつくりしつかきハ清ちに
つまくつくりしもの千

菅原時房

あつきちかさそへなきほりまへあたらね猶すかつほや
男のまとくえなりて猶くひよえ
まつく侍人にまつくみかりにまうき
中とかすくなけきかなへにたかりくに
よう

春宮大夫公実

まさかもそ人のつきハ道なつまて道為男ちや
大納言通為ひさく御中もうと猶もさく

さらすとも人の中にまれなりけり

相模

いかにせむ山田にかるいなかきのまつにまつこそもれなきさこそ

肥後守門侍男にさとられなくあけさきたり

と仰られしてまいらせのひきたり

堀川院御製

忘れなく殿く秋ともかゝるにさもあるや逢見しは　かわれ

多事とかんとくなり

備前前司

早ふ潮によるあるのまへの事我もうなよるありたとせ達

例ならすおはしましける比上東

門院に柑子まいらせ給ふとて人よりみせ給ひけれは

申ける

堀川右大臣

流れつる世の数をかゝれは参末まてに御よろしく

御返し　上東門院

見るたひにもろ月日の絶えれつゝこのことゝろも参らする

備前前司

津ともにまかりさきまいらせてなけきいてすまりて

得ともてかへりくへきもしく独結とこそ

うらもの奉しつるなとらくなりけり

大納言宗通

草枕さこそハ旅のとこならめきよしもあらそて捨し
男もありくしまうくしうらみなりけるか
惜ところかりける思ひわとかりまとらせ
かりきれしきつれつらしかり

桜井尼

のさくら思ひ出るに梅は寒よにさき思ひもさきて返し（つゆ）
後冷泉院御時近江の国より白き鷹
をたてまつりけるをあつかりて人あまたみ
きさせ給ひけるに女房達ゆかしかり
けれはとめして前にてさまたけたるを

ゆくゑなく見し人はあはれとあはせす
わかきまにてつかうまつりけれ

おほ内侍

さひしさは京の西の風さむれはゆひとりて詠みし見え
甲斐国よりの歌とておほやけ人の許に
まとものきよめさ亭ぬりくわうのおはのお
わかそてしもひつしにかきすれかなよ

読人しらす

花の色のまにひとりわかすきハあそひしは人ならぬきさき
百首歌の中に山家を

修理大夫顕季

蜩の声はかりする柴の戸は入日のさすにまかせてそみる

たいしらす

藤原仲実朝臣

年ふれは我いたゝきにおく霜を草のうへともおもひけるかな

殿上ありくへき身ともおもはさりける人の殿上

きゝてとこそてはあり

源行宗朝臣

うら山し雲ゐはるかに立帰りてひのかり道とおもふ

殿上申けるよゆるされさりけるをきゝてよめる

平忠盛朝臣

おもひきや雲井の月をよそに見て心の闇にまよふへしとは

かくしひさしくなりける人のもとへまかりて

まれにとも人はつれなくてのちのまへまつ

かりそめにまかりたりける男のもとより

まうてきたらしとかへりまかれはひ

つかはしける

円大臣家小大進

身のうさもとふひとしほにまきれなんのこれのなるとも

男のかれかれになりて人をつかはしたりけるに

かへりまうてきたりける男まうてこさりけるを

まれにきたりてはつれなくのみのたれる

まうりくわしくあらし風ふく又の日そ
のあらしうつ法のみやしのつまくの
えんそうれりしくりしまよしひまつらし
うらまれけるなり

読人しらず

頼みつる人さへなくして我らうき事あらし
源頼家の御内なりける人の五節のまゐりて後
きりさうらうて備ちにてあまたさうらう
ところもあらみさしろしなり
とまりてつらしうちまれけれは

しあつ

源光縁母

日影うつる夜もなしと秋の月みえけれ
師経ゐりてつらうしよめるは肥後
守盛房野級のまきわり刀をたてまつ
りて頼みまいらせいよよみしを尋ねまいらせて
さしけれとりしをりまいらせなり

源俊頼朝臣

すへての奉りかうつうもあるもとしや流れのまよよき岩 出
大宰の神任とかいつまて久しうく頼
まれて同行なみる手紙なりしえくまり

よをれなくなりにさくらめ

僧正行尊

見る人も独栽乃に侍る○花をとれかはなもさせたり
年ころしめ人のかくしてまかり
なとりてきのりうしりけるを桜を
よませけれはよめる

よみ人しらず

えしれは流るるとも見え迄かすこ作り盛る防
堀川院御時中宮女房達を亮仲実
の紀伊守にて侍りける時菖蒲ふかせん

とくさをひきれんあまこまゐりものに
ゆめしてつくりしもの

前中宮甲斐

人ことに今日はさくらのなかめしに
保寛のくらにつくしけるものの
よはひの○にかたらむ鏡をとりせてかをれなくら
こころしら中もとをこさてよめる

藤原実信母

おとりや墨染くもりなき鏡の光ますますみてと
月のひかりをみてくもらぬ

源師賢朝臣

あけくれは雉もわか袖を日にそへて入山のはの月

為仲朝臣陸奥守にて侍ける時延任

きりしこそてつらしきかな

藤原隆資

まつ我も八十に成ぬるとあふくま川のそこきよみ

きみしきたへの春月にまかりて康平

つらしなきしかもあまたこそてなか

藤原実光朝臣

三笠山神代よりしるきしるしそとおもひぬる

屏風の絵にしつまかりける人々

ところのおきなの家をよめる

藤原家経朝臣

行人もたちとまりける菊の花おりつゝや

おもひしりけり

読人しらす

身なからもおもひしおもふにもかなしく

皇后宮美濃

たまくらにかけもとまらぬつきかけを

上陽人苦最多少苦老亦苦を

いふこゝろをよめる

源雅光

青めもあらぬ姿に成ゆきハ顔のこ社面白けれさ

青黛画眉に細長なつる事さるよ

紀かし

源俊頼朝臣

古たしうくまゐえこの後に公須らくも老すまゐ

とし久しく勝けしかりきそく

まれあらくもんくく人しきりを執家に

油りりわひく見もうに筆の如なや

せおろへてもてうもあるしもするたへ

れなりむまさん見さくくえりみなれ

僧よいかすの人そてこれ外まもきろし有

きすの人ゆそことやもろをこそてつうち

しかり

僧正行尊

なかそよまと稚しりまゆれ姿も人よおゆれ行

大中臣輔弘

条すまよすなせまくと大神宮さすやこ

ひく稀いかるまゝ枕れ為すよ枕かく

きしめ人のさくしらもなし

草れのすひくもまうる露風身のときたす顔ぎ（さすイ）

六條右大臣六条の家作りていろそすて

おりくらしまよひて見んとおもひしに
やまとれはよかりけり

康資王母

千年まてすまむ君か塵清き影すむとこそ思ひ出
宇治平等院の主になりて宇治に
まかりてひさしく見えの山のかひあるまにまに
ありしかたみんとて

忠快法師

うち川の底のみくつも盛なる桜雲よりも山を遠さ
家を人にはなちてたつとて柱にかき
つけ侍りける

周防内侍

住侘て我さへ軒のしのふ草しのふかたかたしけき宿
賀茂成助に初てつかはしける
めくりにかへりきそりてもある

津守国基

いつまてか川の清き瀬に底のみくつをそこもなく
かし

賀茂成助

住吉のまつひさしくてかへらはあはれなる事を思ひしらむ
皇后宮弘徽殿におはしましけるころ

俊頼朝臣西のおとゞのとのゐにさふらひける
人のもとに給はせんとて文かきて給はりけるに
かきたれたるをみてかへしまうけてかへし
ことゞもせて又女のもとにまかりて
見給はれ給ひてまかりてけるとて

よめる　　　皇后宮大弐

花のさかりにむかしを思ひてまかりて
大原行蓮聖人　かりくの小袖つらねて

よめる　　　天台座主仁覚

あはれなと思ふ心はひかされてそでのせばくもある哉

百首歌の中に述懐の心をよめる
　　　　源俊頼朝臣

世中はうき身にそへる影なれや思ひすつれとはなれさりけり

男につきて越前の国にまかりくだりけるに
おもひかけて侍○りけるをとこのもとにつかはしける
あさくなるおもひのかはりにけるかな
　　　　よみ人しらず

斎院の人のこゝろかはりにけるにつかはしける
　　　　よみ人しらず
思ひやる心さへこそくるしけれおもひわびぬる山の奥かな

あはすなりにしかな

参議師頼

待よひの月をなかめけれはむかしを思ひ秋をまちける
あまのかはらよ影のうつりけるをよみて
よめる

源師賢朝臣

かへりけるにあまたの杜の歌よみ侍りける
前太政大臣の家に侍りける女を中将
忠家朝臣と申しける時いひ侍りけるを
ひ侍りけるに忠家にもひ侍りけるを
忘れにけりと聞て女のうた

いひ侍りける

源顕国朝臣

二条院にてひさしく涙をとゝめかね侍りける
花人親隆のかうふり給はりて又の日
侍りける

藤原公教朝臣

雲の上にて初雪をみてことをおもひいたしける
堀河院御時源俊重の式部丞望申ける
申文によみて頭弁重資のもとへ
つかはしける

源俊頼朝臣

日の光あまね○き空の雲ゐにはあるを我身ひとつはへたてつるかな　まく

是とそうしまゐれと内侍周防とのへ

てこれかゑしをましとおほせあれは

まゐらせけれはうちまつる

周防内侍

あめの下ふく嵐に雲晴てさやけき影は見えしつき

そのうちまかふなりしかと

金葉和歌集巻第十

雑部下

公實のかくれ侍りて後かの家にまかりたり
けるに梅花盛にさきたりけるを見て
枝に結び付け侍りける

藤原基俊

昔見しあるしかほにて梅か枝の花たに我に物かたりせよ

中納言實行

桜に梅の花の咲たるを見てよめる
人にあまりて花見る人ありとて後風をまつ
らんと花見る人の心しらぬ何
事もあるかな

平基綱

桜のちりしに風の程はなくて花ちりけるに数多
後三条院かくれおはしまして後
五月一日の頃桜に咲残りたるを見て
桜の花のさかれりけるを見てよめる

藤原兼房朝臣

あやめ草桜のくれに世に折らるゝ花桜かな

少将と申侍しは天王寺にまいり
てよみ侍りける

六條右大臣

難波潟浪の上にてみれはこそ月も心ことにはみゆる

郁芳門院にわたらせおはしまして又の
年の秋知信よりつかうまつりける

康資王母

うらむなよ秋はつきぬと思ふとも虫の声にはすむ秋はあり

之し　藤原知信

虫の音はこの秋のみそなきまさる別の時をかくもしりて

下臈にこえられ侍て歎き侍りけるころよ
みける

源俊頼朝臣

世の中は河の瀬の川は浅きれとも身のうき草は流れこそすれ

律師実源の許より女房の佛供
粮せんとて世侍まてはすかりく
見れけるをも人をこそはおもしき
そこそこのしくはさくるとして
立まつ持にあるれの門より女房を
つかはしひとくしまさむの手紙を
さしおかりまて従僧してよう

せくゝりて見ん遠ハ志らのゝのゝとくなれ
うちにかくゝ入りまゐる所

よみ人しらす

玉くしけあけゝまちりもまさる道にて歓ふへしうすき月と
とも遠

大納言よゝを拝しく給ふへからしくかくめり
のさこつけ給ふへからさと

月にまゐる物あらまゐり見んとすゝむやんことすく出家せ
わんの守知縄よとこそれ給ふへからはなされ
そちもとものゝ人のゆゝさ親しく帰りてまし
まらなとこそきそしめる

藤原知信母
知信か

流ても身をあはせのまゐり同法深道深と給ありてけれ
こちらまとゐすゝ法給ふへからは人のかなり
いつまともゝいつもれはしかぬへ

よみ人しらす

呉竹の世に沈める宿は身も同しくよなむ
亀永給ひ出家しゝかとこそて終り
あやしくもありし法は圓したりしひつき
しかる

藤原通宗朝臣

よそのかしこきをひさてめてたしにしらぬ六十時重て

律師長淑（清イ）

よそにてそきゝつるのちにみえてもゝうらさ
たちかへり歌をよみて我からもとひかはしまうれきさ
の仲の女子のもとへとはれ歌ゆきまうかる

穂へくとひまつるをてしあら

大蔵卿匡房

左は夏をとりて歌やまさるとておもひかまさてまとゝたいは

従三位藤原賢子例すゝめ事わり

てうらきいろかきくあかしまうり人のくわ

許らいてみえとふひて給はれは語ら

藤原賢子

毎とし九月の秋の今八日を待我身ならはきゆる

身まかりて後久しうみなりまかる

母を夢にみんてしある

権僧正永縁

夢のうち着れ人をおもひこれは先の穂をおもひきれ

人のむすめ母みりかへりまかりてみまけれは

穂にありさ夜をつくこれなれはと

まの時かきまくまかりかりまうさ

見人しら

家の風の池にうつりて[illegible]てあまた侍る

小式部内侍うせて後上東門院より
年ごろ給はりける衣をなきあとにも
遣はしたりけるに小式部内侍と
書きつけられたるを見てよめる

和泉式部

語らひける若き人のもとに遣はして[illegible]
恋しき人などこれ[illegible]のとして
侍りけるによめる

平忠盛朝臣

今はとて[illegible]年の内に雲居の[illegible]
陽明門院そこにおはしまして侍り御
[illegible]文の日雲居[illegible]
まかりとかへりてよめる

菅原資隆 信イ

宮すゞみ[illegible]と思ひて
白河院の女房これかれ侍りける家の
南面の花盛りに咲きて侍りけるを見て
よめる

僧正行尊

春の末つかたひとりまかりて[illegible]松の木の花の散りけるを[illegible]

藤房朝臣重服になりてこもりゐて
侍りけるに出羽弁の許よりとふらひ
けるを見えの返せしと申ければなり

橘元任

過さ春の夕暮風はあはれなる人よとはれや

範国朝臣にくして伊予国に侍りける
ときに正月より三四月まていかにも雨
のふらさりけれはなはしろもえせてさはく
川よ祈りさはきされとかなはさりけれは
守能因にまかせて歌よまいらせく
雨いのれと申ければまゐりて祈申ける
事

能因法師

天河苗代水にせきくたせあまくたります神ならは神

神感ありて大雨降て三日三夜
やまずと家集にみえたり

心経供養してそれを人々によませ給
侍りけるに

堀河左大臣

よろつのかみも遠としもちる法すれは羽の常は宮社に
法文のありけるをとりてすゝ女房の許
よりこゑよ申よ寺しもしあつくありける女

ふるくさすかしとりけるものをうかのさて
させ給ひけるとなり

三条

見ましに我はさくりをみてしのはせてとうとえり
さくらに
月はありきの東膳西上人のまへに
つくらしとなり

僧正行尊

いなみのきこえたまきを我すきと承り秋風の時
劍すゑてとるまゐりしはいつれもなあひ
つけゝるもかさきに

源行宗朝臣

いかなるうき世中にはまかり思ひ思はへはへきことを
寶氣聖人山寺にこもりゐてはへりける
てつかはしける

静厳法師

なかはにかひなきかたもとぞ見えたれはかくなむ同じさま
八月計に月あかゝりける夜あかつきの
空のけしきをみなとひよせさせたまひて
宮すの女房にいひつかはしける

選子内親王

あらし仏となるみちに善光て西へかへる月をみる

依釋迦遣教念阿弥陀と云事をよめる

皇后宮肥後

教おきて入にし月のなかりせはいかて心を西にかけまし

清海上人往生と聞おそりて経よみ
入りきりの枕のまゝに侍れはいひつかはしける

よけれ新

まちえてそ風の吹ませてちりはてしひとの

普賢十願の文に願我臨欲命終
時といふ文をよめる

覚樹法師

命とも罷も家にやうら消なはうかまくゆ浪千尺

衆罪如霜露といふ文をよめる

覚誉法し

罪もしも霜にも消ぬ法の光すみかもさすらん

弟子衆生といふ文をよめる

僧正勤円

吹のほる山風すらも世に衆生しの玉をこゝにや

提婆品の心をよめる

勝西上人

法の為身を薪になせてやそうれしきをとられ思つゝ

皇后宮権大夫師時

名をさへ蓮の根よ此月を苔の底に人の影に

龍女成仏をよめる

勝超法師

わた海の底のもくつと見えしをいつその室に月を見るらん

涌出品の心をよめる

権僧正長縁

ちゝの公のみなもとはいふなれはこの身をこそさいふなりけれ

不軽品の心をよめる

覚雅法師

あ雑き法をひろむる聖たに進人をも道ひかれける

薬王品の心をよめる

懐尋法師

うき身をとも思ひきをはやまにのりに心をとまりけれ

人のりとかく経供養しもろゝ文面

弟子授記品の心を説かゝるに繋寳

珠のこゝろをよめりもかくらすとしも

てろけりのは結ひつましく行きける哉

見んとくもしふかまよにゆきける

權僧正永縁

いかにして衣の玉をさとりけむゑひのまきれに人もおしへに

維摩
俱他の八のことひとくにきこえなり

此身如幻といふ事を讀る

懐尋法師

いはまもるひかりをまつる中にもあきのまくらのかすみをそはたし

常住公月輪といふことをよめる

澄成法師　誠イ

まことにはくもるにはよし月をあやまりてむかしの秋もはれなくもなき

こゝろをもこそてらす事を

源俊頼朝臣

よもの海の波のよるよるたちくるはあしのかれはのこゑにきこえて

醍醐の舎利会に花の散るをよめる

珍海法師母

まことにもおもひしらるゝ法の道はちるも花なりきえもはてなむ

地獄の絵にかきたる人のつみをみて

こゝろさへくるしき

和泉式部

あさましや剣の枝のたはむまてこはなにのみのなれるなるらむ

人の許に侍けるに仏の御名くらせ

かむしきれしきことのはなまなく
入くおほちに至てるきまゝ寺の家
れわゝにさゝの雉郎公の鳴をこゝろく
いさのしとまあり

田口重如

草なるかなそへは吉野電るさそれゆらむもくや露
うてつるまあちいろしそまあり
へ舟ゝ守くゑをうつゝ佛人やりすぬちひさ寺
障子の絵に天王寺の西門にて法師の
舟にのりて西さまにこきはなれて行
かたかけるをよめる

源俊頼朝臣

あみた仏ととなふるこゑをかちにてや
くるしきうみをこきはなるらん

連歌

ゐかりまう雨れ水のまにあきまゝるゝん
のはしらひろるをこゝて

永成法師

あつま人のこゑこそきたにきこゆなれ

律師慶範

みちのくによりこしにやあるらん

わかみれは花とこそ　頼継法師
ちらぬのゝかれぬ花とこそ咲けりまた
公資朝臣
梅津の梅はちりやしぬらん
賀茂の社ねぎぞつくとおもしまうと
こゝにて　神主成助
さかきはらにさのみなるてぞこゝろなすれ
行重
いかなる神のはくよなるらん
宇治ありく田の中に花さける男みてける

まうでゝまかりく　僧正源覚
春日のまへにまゐり給へしおとされけるに
宇治入道前太政大臣
かはらやのいたしきをとられけるや
日の入を見て
観暹法師
日のいるはくれなゐにこそにたりけれ
平為成
あかねさすともおもひけるかな
田中に馬のたてるをみて　永源法師
田にはむこまはくろにぞありける

永成法師
すみなれし郷をみてつまこそ
うちやとゞて　読人しらず
かくこやの板まそみてもこゝろかな
助成　俊イ
はらはれてやつゝりをあらん
つゝのイ
志のの橋をみて　為助
つまあらくこそつしのれしまかな
国忠
ゆくすゑの月のいつみをもおもふらんそ

宇治へまかりける道にて日来雨のふりければ
まさりてあれ出て賀茂川を男のわたるを
とゞまりてまたさけく渡るをみて
頼綱朝臣
賀茂川をつるこそみてもわたるかな
信綱
ありそ海をはおもしろくおもひて
おもきをみんとて　読人しらず
よしの河せをおもはしいふらん
匡房母妹

うちにてとりいまへし梅をおほせつかはしける

和泉式部のかもへまいりけるに
わらうつにあしをくはれてかみをまきたりける
をみて　神主忠頼
ちはやふるかみをはあしにまく物か
　　和泉式部
これをそしもの社とはいふ

源頼光の但馬守にてありける時
館のまへにけた川といふ川のありけるに
舟のくたりけるを蔀あけさせてみて
とらせまれしゐてしとみのもとに
まかりけるにをとこそてくちすさひ
にといひける　　源頼光朝臣
たてかる舟のすくるなりけり
是を連哥に聞なして
　　相模母
あさまたきからろの音のきこゆるは
　　よみ人しらす
花くさきちるてふふねそありける

風のまにまにくらしてみなりけり
ときはの草よこそ葉のあかりもなきとかり
すそをもつきとめて
よみ人しらす
ひくらしのこゑをきくとひさしき
とりてみはいろかはりつゝ花なれと
色を鏡に今もうつるかまゝに鳥まいに
ちりくるとそて
雨やれもこゝしもちるの成にけり
なきこゑすらハいてらまし　やそ

蓑むしのむしめれくる咲つる枝よわかちと
かへて　律師慶運
むめの花のさきくちりのこのむし
まへかのこしいのつもの
雨よりハ風てさこそやおもはれん
うのはなよろつとそて　頼舜法師
わうしとかへれとくるゝきさりける
よみ人しらす
さもそれハとこそれにちりのみよしくもよ

瀧の音はよろつよまてときこえて

よみ人しらす

ちるをこそなけかれ瀧のしらいと
くりかへしひくらんものとおもはれしを

精をみんとて

成光

わくすちのをやたえしとはかる

観暹法師

見るまゝに袖こそぬれてかはりけり
七十にあまりてつきもすみて侍り
あやしきことをありしつけく

源俊頼朝臣

まくらしふきちかる塩のたまはかし
ちらしくるめもしかれおもふか

巻第七　恋哥上

摂政太政大臣家にて恋の心を詠る
藤原為真朝臣
年事ふきとうき田の森に宿かりて社我身やなれ
たの見てある恋　藤原親隆朝臣
恋しさそなたにも今をもそのしまは社にうき雲
在京乃下巻にあり上
山の歌合に恋の心を　隆覚法師
身の程と思ひしる事のみやつきすまぬ人の情なり足
在両載下染ましや上

恋の心を　琳賢法師
わくらはにとはるゝや紅の涙に染ぬ袖やかはると
在逢見ての下にありけり上

巻第八　恋哥下
題しらす　読人不知
いとせめて恋しき時は播磨なる飾磨に染るあなかちに
在逢事の下逢事なし上
衣之部　在異本

132X
104
16